Rico Peterson 先生来日特別講義報告書

米国ノースイースタン大学における手話通訳者養成

本事業は、文部科学省特別教育研究経費（筑波技術大学／平成１９年度～２３年度）
による聴覚障害学生のための拠点形成事業の一部です。

国立大学法人
筑波技術大学

特別講義の様子。終始なごやかに進められていた。
（12 月 8 日筑波技術大学にて）

はじめに

筑波技術大学障害者高等教育研究支援センターでは、2010 年 12 月 5 日～12 日にわたりアメリカで長く手話通訳者の養成に携わっておられる Rico Peterson 先生をお招きし、アメリカにおける手話通訳事情や通訳者養成の現状について学ぶことができました。

先生との出会いは、2007 年 12 月に実施したアメリカ視察「高度専門領域に対応した手話通訳者の養成」でした。当時、高等教育機関における手話通訳者の養成が今後の課題と感じた我々は、アメリカロチェスター工科大学を訪ね手話通訳者の養成に関する講義を受けました。このときメイン講師として 3 日間の講義を担当してくださったのが、2005 年までロチェスター工科大学で手話通訳者養成学科の主任を務めておられた Rico Peterson 先生でした。

その後、2010 年 2 月には先生が教鞭を執っておられるノースイースタン大学を訪れ、すばらしい教育体制を拝見することができました。この感動をぜひ日本の皆さんにもお伝えしたい、そんな思いで企画したのが今回の来日というわけです。

先生のご協力で実現した今回の来日では、日本の手話通訳養成の現状を知っていただこうと国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科や世田谷福祉専門学校手話通訳学科を訪問し、実際に指導にあたっていらっしゃる先生方との懇談の機会を持つことができました。また、短時間ではありましたが京都の全国手話研修センターにも訪れ、全日本ろうあ連盟および関連団体幹部のみなさまとお話をさせていただきました。加えてその翌日には、関西学院大学で開催された近畿手話通訳問題研究会の大会にてスピーチをいただくとともに、いくつかの分科会に参加して地域における手話通訳者養成の現状にも触れていただくことができました。さらには、高等教育機関の取り組みとして同志社大学の障害学生支援の様子もご覧いただき、支援を担当されている学生さんをはじめ教職員の方々を対象にした講義もしていただきました。

こうした過密スケジュールの中実現したのが本学における来日特別講義です。2 日間にわたる講義では、ノースイースタン大学における手話通訳養成課程の概要から細部にわたるまで、余すところなくお話しいただくことができました。特に講義の実演はすばらしく、先生の指導者としての力量に感激させられた参加者も多かったのではないかと思います。

本報告書は、こうした 2 日間の講義内容をベースに、1 週間のうちに先生から学んだ数々の事柄を詰め込んだ資料です。ここでは講義で得た知識の他に、先生のお人柄が伝わってくる言葉やエピソードもできるだけたくさん盛り込むよう努力してみました。本報告書をお読みになった皆さんが、手話通訳者として、また指導者としてのすばらしい先生のお姿に触れていただけることを祈って、刊行の挨拶といたします。

2011 年 3 月 31 日

筑波技術大学　障害者高等教育研究支援センター　准教授
白澤麻弓

もくじ

Rico Peterson 先生来日日程とプロフィール・・・・・・・・ 1

アメリカにおける手話通訳事情・・・・・・・・・・・・・・・ 2
１．アメリカの手話通訳養成をとりまく現状と課題
２．NIC（全米手話通訳者資格）
＜参考＞NIC（全米手話通訳者資格）試験
３．NIC 資格の維持・更新研修
４．全国統一カリキュラム作成に対する論議
＜参考＞NIC 誕生秘話

ノースイースタン大学における手話通訳者養成・・・・・・13
１．ノースイースタン大学
２．ノースイースタン大学手話通訳者養成課程の概要
１）ノースイースタン大学手話通訳者養成課程の教育理念
２）教育課程の概要と入学試験
３）カリキュラム構成
４）シラバスと課題・教育ツール
５）授業内容の例　－質問的談話
６）授業内容の例　－物語的談話
７）授業内容の例　－説明的談話
８）授業内容の例　－模擬通訳
９）授業内容の例　－エクササイズ
３．手話および手話通訳の評価指標
１）手話通訳の評価指標
２）手話力の評価指標
４．おわりに

Rico Peterson 先生名言集①・・・・・・・・・・12
Rico Peterson 先生名言集②・・・・・・・・・・43

巻末資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
・ノースイースタン大学カリキュラム MAP（対訳）
・GTC Log ガイドライン（原文・日本語訳）
・GTC Log 記録用フォーム（対訳）
・通訳観察レポート　ガイドライン（原文・日本語訳）
・通訳観察レポート　提出用フォーム（対訳）

Rico Peterson 先生 来日日程とプロフィール

Rico Peterson 先生

ノースイースタン大学（Northeastern University）手話通訳者養成コース准教授。元来は俳優であったが、1970 年代初頭、全米ろう者劇団とともに仕事をしたことをきっかけに手話の世界へ。その後、1975 年～ギャローデット大学にて演劇を指導。さらに、長年の手話通訳経験を経て、複数の大学で手話通訳者養成に携わる。2000 年～5 年間にわたりロチェスター工科大学 NTID 手話通訳者養成課程学科主任を務めた後、2005 年手話通訳者の養成で世界的に名高いノースイースタン大学に赴任、現在に至る。手話通訳者養成のためのカリキュラムに関する研究で博士教育学（Ph.D.）取得。日本の手話通訳士資格にあたる、全米手話通訳者資格を持つ手話通訳者。

代表的な著書に「The Unlearning Curve: Learning to Learn American Sign Language」（Silver Spring, MD: Linstock Press）「Interpreting and Interpreter Education: Directions for Research and Practice」（New York: Oxford University Press）など。

来日日程　2010 年 12 月 5 日～12 日

12 月 5 日（日）	来日
12 月 6 日（月）	世田谷福祉専門学校手話通訳学科　訪問
12 月 7 日（火）	国立障害者リハビリテーション学院　手話通訳学科　訪問
12 月 8 日（水）	筑波技術大学
12 月 9 日（木）	特別講義「ノースイースタン大学における手話通訳者養成」
12 月 10 日（金）	同志社大学　講演「アメリカ社会における聴覚障害者へのアクセス保障」 全日本ろうあ連盟、全国手話通訳問題研究会および全国手話研修センター関係者との懇談
12 月 11 日（土）	近畿手話通訳問題研究会　講演「アメリカにおける手話通訳認定制度」
12 月 12 日（日）	帰国

アメリカにおける手話通訳事情

１．アメリカの手話通訳養成をとりまく現状と課題

アメリカにおける手話通訳者の養成は、大学や短期大学のレベルで実施されている。日本での地域の講習会のようなものはほとんど存在せず、大学という公的な教育機関の中に手話通訳者の養成が位置づけられているわけである。しかし、だからといって問題がまったくないわけではない。

表　手話通訳者養成課程の種類と数

プログラムの種類	学校数（校）
修了証レベル（Certificate）	41
準学士レベル（Associate）	73
学士レベル（Bachelor）	35
修士レベル（Graduate）	2
通信課程（Distance）	5
合計　のべ数（実数）	156（106）

全米手話通訳者登録協会（RID）の調べによると、アメリカ全域で手話通訳者養成プログラムを提供している大学の数は、のべ 156 校※とされている（上表参照）。しかし、このうち 100 校以上が準学士や修了証レベルのプログラムで、通常 1~2 年の教育課程になっていることが多い。いわゆる 4 年制大学といった学士レベルでの教育を行っている大学はわずか 35 校に過ぎず、十分な教育がなされているとは言い難い。

また、現在アメリカで用いられている手話通訳者の資格は、全米手話通訳者資格（NIC：National Interpreter Certification）と呼ばれているが、この受験資格には「準学士号を所有していること」という項目が含まれており（2009 年 6 月～）、2013 年以降はこれを「学士号」に引き上げることが決定されている。そのため、現在準学士レベルで養成を行っている大学は、カリキュラムの変更を検討せざるを得ない状況となっており、今後の展開が注目されている。多くの場合、4 年制の大学と協力し、2 年間のカリキュラムを終えた後、

「今日から二日間、手話通訳についての話をします。だから、まずはじめに今日この会場にいらっしゃる情報保障のみなさんにお礼を申し上げたいと思います。」Rico Peterson 先生の講義はこんな言葉で始まりました。そして、日英通訳者にご協力いただき作成した日本語訳スライドについて「もしこの翻訳に一つでも間違いがあったら、それは完全に・・・（冗談っぽく日英通訳者を見ながら）講師である私の責任です。」と続けられたのです。

実はこの日、会場には日英通訳者に急遽翻訳いただいた日本語訳スライドが提示されていました。しかし、講師からスライドが届いたのが直前だったこともあり、暫定的な訳の状態で提示せざるを得なかったという事情がありました。

Rico Peterson 先生はこの状況を気遣い、日英通訳者の精神的負担をすてきなジョークとともに和らげてくださったのです。ご自身手話通訳者として活躍されながら、通訳教育に携わっているスペシャリストだからできる配慮、先生のお人柄に触れた一幕でした。

※ Rico Peterson 先生の講義の中では 130 校というお話しがありました。一つの大学で複数のプログラムが提供されていることも多いので、これは数え方の違いによるものと思われます。

4 年制大学に転学するような体制がとられると考えられているが、すべての大学でこうした移行が可能かどうかは疑問視されており、混乱が巻き起こる可能性も示唆されているとのことである。

さらに、以前はデフコミュニティの中で行われてきた手話通訳者養成を、大学機関で実施することになった結果、失われてしまったものも多いというのが Rico Peterson 先生ご自身のお考えである。ノースイースタン大学ではこうした反省に基づき、大学における公的な教育とコミュニティの良さとを最大限両立させるようなカリキュラムを真摯に検討されているとのことである。

なお、すでに NIC 資格を取得しているベテラン手話通訳者の中には、学士号の取得に消極的で、その必要性を感じておらず、さらには受験資格に学士号を課すことに対して強力に反対する勢力もあったとのことで、この決定には相当長い時間の議論を要したとのことです。最終的には、すでに NIC 資格を取得した通訳者のための代替手段も用意されることになったそうですが、これには Rico Peterson 先生ご自身も多少ご意見がおありな様子で、冗談めいた口調で「完全に政治的な配慮の産物」とのコメントをされていました。

ちなみに、ここで言う学士号は学士（手話通訳）に限らないそうで、どんな分野の学士であってもかまわないとのことです。これは、学士レベルの教養と能力を有していることが手話通訳者にとって重要ととらえられているからで、むしろ他分野の学士を推奨している方もいらっしゃるとのことです。

また、手話通訳者の教育にどのぐらいの時間が必要かという点についてはさまざまな議論がありますが、少なくともノースイースタン大学では「4 年ではまったく不十分である」と考えているとのことです。Rico Peterson 先生曰く、アメリカの他の音声言語の通訳者の養成は、少なくとも修士レベルで行われており、学士レベルで養成する大学は先生の知る限り 2～3 校しかないそうです。しかも、そのコースの入学条件として課される言語レベルは、手話通訳者養成課程の学生の卒業時の言語レベルよりも遙かに高いそうで、言語が十分に身に付いていない段階で通訳練習に入らざるを得ない現在の状況について、問題性を指摘していらっしゃいました。

さらに、外務省に付属している言語トレーニング機関の調査では、ASL のような言語を身につける場合、中級レベルに達するまでに少なくとも 700 時間以上の学習が必要としているそうです。これは、多数の言語話者をトレーニングし、外交官として他国に派遣してきた経験から算出された数字だそうで、個人差はあるもののある程度の信頼性がある数値とされています。一方、手話技術の向上を重んじるノースイースタン大学でも、1～2 年次に学生が取得する手話実技科目の合計時間は 180 時間で、圧倒的に少ないことがわかります。ましてや通訳をするということになると、通常は上級あるいは最上級レベルの言語力が求められるわけで、手話通訳の指導にあたる者はこれがいかに少ないかを認識しなければならないとおっしゃっていました。

２．NIC（全米手話通訳者資格）

アメリカではこれまで、全米手話通訳者登録協会（RID）が行ってきた手話通訳資格試験が、実質的な全米統一資格と見なされてきた。しかし、その一方で全米ろう者協会（NAD）による資格も並行して発行される現状があり、両者の間で求めるものが異なるという問題が指摘されていた。長年の協議の末、2004 年以降 RID と NAD が共同で実施する NIC 試験が開始され、移行期間を経て現在 NIC の完全実施に至っている。この間の経緯については、Rico Peterson 先生が昔話風に語って下さった内容があるので、そちらをご覧いただきたい（11 ページ参照）。

この NIC は筆記試験・面接試験・実技試験の 3 つからなる試験（下図参照）で、筆記試験に合格した人だけが面接・実技試験に進める形となっている。筆記試験合格者の猶予期間は 3 年間であり、日本の手話通訳技能認定試験（手話通訳士試験）と同様、この間は筆記試験の受験が免除される。資格は NIC／NIC-Advanced／NIC-Master の 3 段階で、いずれも従来実施されてきた RID 資格よりレベルが底上げされている。しかし、最近テスト対策を強調する講座が増加し、合格率が異常に上昇していて、これも新たな課題になっているとのことである（45%→88%！）。

試験の詳細は以下の通りである。

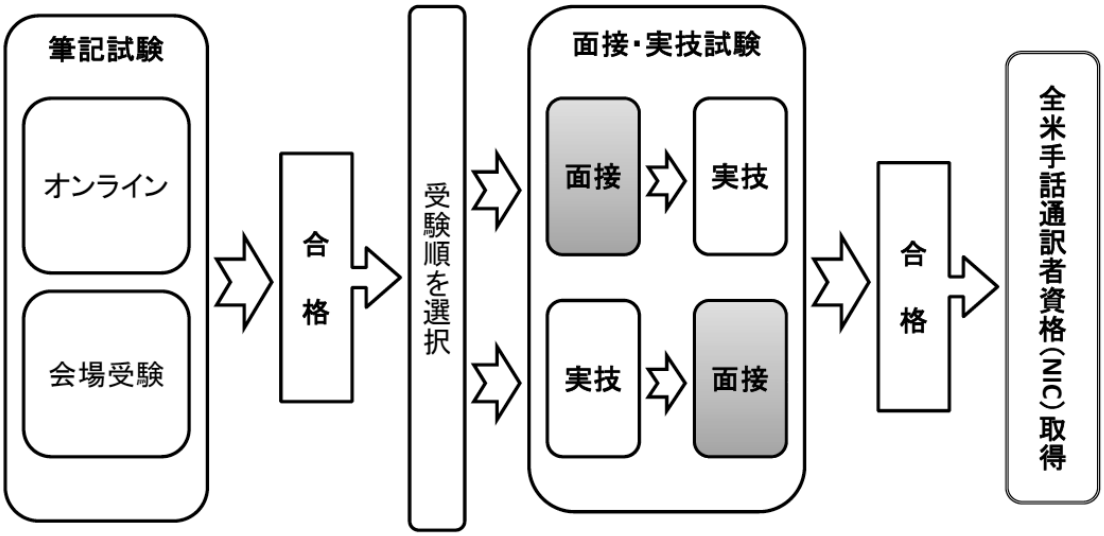


図　全米手話通訳者資格（NIC）試験の流れ

NIC（全米手話通訳者資格）試験

■　筆記試験

筆記試験は、150 問からなる試験で、設問には 4 つの選択肢から選ぶ選択式で回答する。筆記試験の問題は、手話通訳や通訳現場に関わるものなどを含む 10 のテーマに関するものが出題される。そのテーマは、7 ページに挙げられた 10 の課題を含む、幅広い分野をカバーする内容となっている。

また、インターネット上でのオンライン受験も選択が可能となっており、この場合、受験者は試験実施後すぐにその結果を把握する事ができる。筆記試験に不合格となった人は、6 カ月以上の期間をあければ再受験が可能になるとのことであった。なお、筆記試験の問題は何種類かをローテーションして使用しているということであった。そのため受験者には厳格な守秘義務があり、万一問題の漏洩が発覚した場合には、資格剥奪はもとより除名処分になる場合もあるというお話であった。

【筆記試験：問題例】

1. From a cultural perspective, the core Deaf community is most appropriately thought of as a
（文化的側面から見たとき、デフコミュニティに最もあてはまるものは次のうちどれでしょう？）
a. bilingual community （バイリンガルなコミュニティ）
b. disadvantaged and segregated group （不利な立場におかれ隔離されたコミュニティ）
c. disabled group （障害者集団）
d. linguistic minority group （言語的マイノリティ）

【解説】アメリカのデフコミュニティは、自分たちの事をバイリンガルグループだとは考えていない。また、「障害者」と呼ばれることにも強く反感を持っている。少しひっかけ問題のようですが、正解は d の言語的マイノリティグループです。アメリカのろう者たちは、自分たちを言語的マイノリティグループであると考えています。

筆記試験に合格した人たちは、次に面接・実技試験を受けることになる。面接試験と実技試験の順番は、受験者自身で選択する事が可能となっている（4 ページ図参照）。面接・実技試験も各会場年 2 回程度実施されており、それぞれの会場で時期をずらして行っているということであった。

■ 面接試験

面接試験の試験問題は、ろう者の手話による出題で、あらかじめ録画されたビデオによって提示される（6 ページ図参照）。ビデオでは、まず出題者となる 3 人のろう者がそれぞれ簡単な自己紹介を行う。受験者はこの 3 人のろう者の中から自分が一番コミュニケーションしやすいと思う出題者を選択する。するとその後は、この選択された出題者によって、試験問題が提示される形となっている。試験問題は全部で 5 問あり、回答はカメラに向かって手話で行う。この際使用する手話は、ASL や英語対応手話、音声付の手話など、受験者が自由に選択することが可能であり、用いる手話表現や手話の技術については評価対象にはならないとのことである。回答時間は 1 問につき 5 分で、この間に自分の考えをまとめ、回答することが求められる。この際、メモを取ったり、回答を文章にしたりすることも許されている。なお、試験問題の内容は、自分が手話通訳者としてこのような場面に出会ったらどのように対処するかというような通訳現場での判断や選択に関する課題が中心となっているとのことである。

【面接試験：問題例】

あなたは手話通訳者です。今、あなたは、車を購入したいというろう者の老夫婦とともに、商談のため車のディーラーに来ています。セールスマンも売る気満々で、少々押しつけがましくセールストークをしています。その商談の途中で、セールスマンが用事のために席を外し、商談室から出ていきました。その時、商談室の外で先ほどのセールスマンが、上司とおぼしき人に向かって次のように話しているのが聞こえました。「ボス、楽勝ですよ。あのろう夫婦からがっぽり儲けてやりますよ！」さて、あなたは、手話通訳者としてどうしますか。

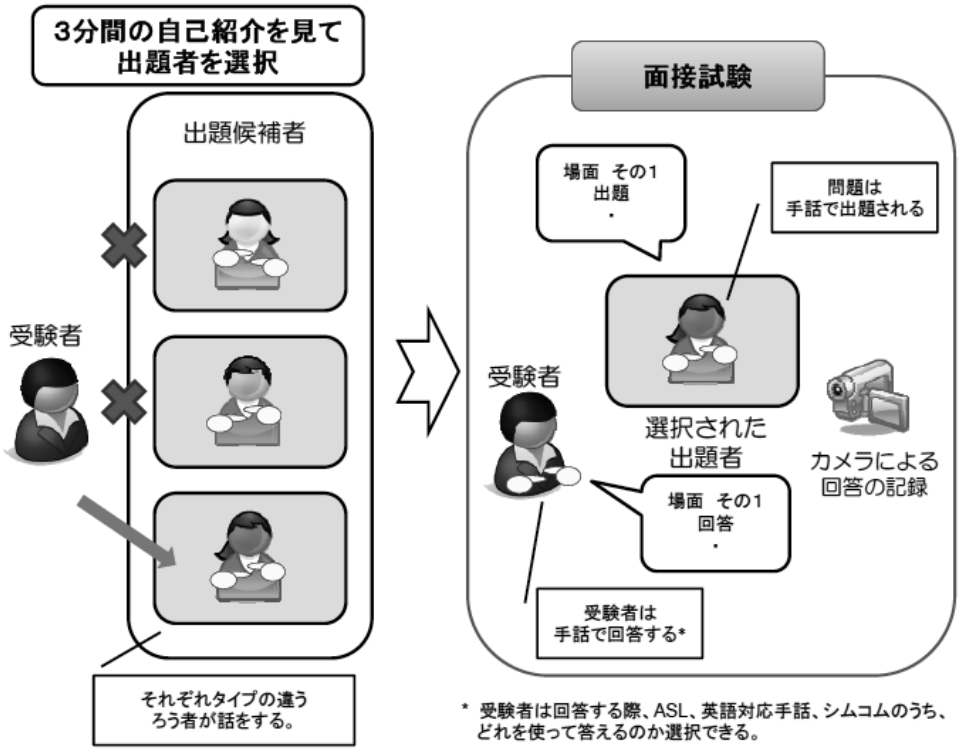


図　面接試験の流れ

面接試験の評価ポイントは下記の 3 つとなっている。

（1）問題状況における課題をきちんと整理して把握できているか。

（2）一つ以上の適切な解決方法が示されているか。

（3）選んだ解決策が長期的にどのような影響を及ぼすか検討できているか。

これら 3 つのポイントを以下の 4 段階で評価する。①は一番評価が低く、④は一番評価が高くなる。

① 誤った分析を行っている。

② ごく表面的または一面的な見方の分析しかできていない。

③ 思慮深く、前向きな解決方法を考えようとしている。

④ 正直に自信と問題意識を持って解決に集中して取り組むことができている。

NIC の認定には、一番上級である NIC-Master という認定資格があるが、この NIC-Master を得るためには、すべての問題において④の評価が必要とのことである。

■　実技試験

実技試験は、録画されたビデオで提示される場面にあわせて手話通訳を行う。通訳場面は全部で 5 つ出題され、場面設定はろう者の手話による語りであったり、ろう者と聴者の会話場面であったりさまざまとのことであった。ただし、これら 5 つの場面の中には、必ず ASL、英語対応手話、中間的手話が含まれるということであった。

試験では、いきなり通訳場面が提示されるのではなく、下にある問題例のように、まず課題となる通訳場面において対象者となるろう者や聴者の自己紹介と、場面設定に関する情報提示がなされる。受験者は、与えられた通訳場面において、どのような所に着目して通訳を実施すれば良いか判断して、問題に臨むという流れになっている。そして、受験者は、提示される課題のビデオを見ながらその場面の状況に合わせて通訳を行う。例えば、ろう者の手話による語りであった場合には読み取り通訳を、ろう者と聴者が会話している場合には、聞き取りと読み取り通訳を、聴者だけが話している場合には、聞き取り通訳を行うというように場面に合わせて通訳方法を選択する。回答はカメラに向かって聞き取りまたは読み取り通訳を行い、それを録画する方法で行われるとのことであった。

【実技試験：問題例】

ビデオにろう者の女性が現れ、「私はサリー。秘書になりたいので面接を受けようと思っています。」と自己紹介を始める。次に、面接に臨むにあたっての情報が語られる。「私は秘書としての経験は豊富にあります。1 分間に 140 文字入力する事ができます。Word、Excel のプロと言っても良いほどのスキルがあります。これが私の履歴書です。」

そして、履歴書が画面に提示される。その画面をクリックすると Word で作成された履歴書が表示され、それを受験者が読むことも可能になっている。

また、面接官側の情報も見ることができる。例えば、以下のような状況を面接官自身が語る。「面接官のスミスです。この会社の部長をしています。（履歴書を見て）ろうの女の子か。なるほど、これから面接をしようと思うけど・・・。」という具合である。

そして、実際に面接の場面が提示され、受験者は手話通訳者として通訳を実施する。

この実技試験は、あらかじめ場面の状況を詳しく提示することで、受験者が与えられた通訳場面において通訳者として行った状況把握や意志決定が適切であったかどうかを評価する。同時に、英語と手話の二言語の運用能力を測ることが主な目的であるとのことであった。

NIC 試験の評価方法は試験全体を通して以下に挙げられる 10 の課題についての評価が行われる。これら 10 の課題のそれぞれは、知識面と技術面とに分けて詳細な下位項目が設定されている。ここではその 10 の課題のテーマを紹介する。

1）　依頼内容についてのアセスメント

通訳を依頼された内容が、自身の通訳技術で対応可能か適切に判断できるか。

２） 依頼目的や内容の理解

通訳を受ける人々の依頼目的や依頼内容を理解しているか、また依頼目的をまっとうするための準備を行っているか。

３） 専門知識・技術の獲得と維持

通訳者としての専門知識や技術を維持するために、研修会へ参加しているか。また、指導者でもある通訳者のもとで実技指導を受けるなどの自己研鑽を行っているか。

４） 通訳倫理

手話通訳を専門的な職業であると認識し、その業務にあたっては常に倫理綱領を適用しているか。

５） 文化の多様性に対する理解

文化の違いや民族の異なる人々に対して、通訳者として常にそのことを意識し配慮した通訳を行っているか。

６） 場の調整技術

通訳中に、通訳対象者の意思疎通を円滑に進められるよう注意を払い、意識的な働きかけを行っているか。

７） 場に応じたモードや用語の使い分け

通訳場面やその場の雰囲気に合わせた言葉を遣い、それを維持することができているか。

８） 等価性の維持と評価

通訳中に聴覚障害者と聴者それぞれの理解の度合いを確認しながら、状況に応じて修正を加え、異なる言語の間であっても等しい内容の通訳を提供しているか。

９） 手話の運用能力

手話の文法を正しく理解し、手話で語られる内容を適切に把握することができているか。また、英語で話される内容に合った手話の語彙を選択し、正しい文法を使用して手話に通訳できているか。

１０）英語の運用能力

英語の文法を正しく理解し、英語で語られる内容を適切に把握することができているか。また、手話で話される内容に合った英語の語彙を選択し、正しい文法を用いて英語に通訳できているか。

アメリカでは、以上に述べてきた手話通訳資格の他に、ろうの手話通訳者に対する資格も発行されています。現在のところ、資格を持って活動しているろうの手話通訳者は概ね 100 名程度いるそうですが、彼らに対する公的な養成は行われていません。そのため、ノースイースタン大学では現在助成金を申請中で、今後こうしたろうの手話通訳者に対する養成カリキュラムの検討に入っていきたいと考えていらっしゃるそうです。

３．NIC 資格の維持・更新研修

NIC 資格を取得した手話通訳者は、資格の維持のために 4 年間に 8.0 単位の CEU（Continuing Education Units：生涯教育単位）を取得することが求められている。CEU というのは看護師やソーシャルワーカーなど医療福祉分野で働く専門職に課された資格維持のための単位で、1CEU は 10 時間の研修にあたる。通常は、各種研修会や大学・大学院などのコースへの出席、ワークショップへの参加、メンターによる個人指導等で得られるが、講師レベルの手話通訳者の場合はこうした機会での指導担当も単位に割り当てることができる。ただし、こうした制度は単に単位取得のための研修会出席という事態を招きやすく、形骸化しがちな側面もあるとのことである。実際、アメリカの場合も 4 年目で CEU がまだ取得しきれていない手話通訳者があわてていろいろな研修に出席するなどの状況も見られるそうで、改善方法を検討しているとのことであった※。

ちなみに、アメリカ全体で現在フルタイムの手話通訳者として働いている人の数は約 6,000 人程度、パートタイムが約 5,000～10,000 人程度いるとのことである。このうち最も身分保障等がきちんと行われているのはビデオリレーサービスで働く手話通訳者で、彼／彼女らの給与は$50,000（500 万円）／年間程度（フルタイムの場合。29 時間／週以上勤務の場合は、保険等の保障あり）とのことである。他に、政府関連機関にも多数のろう者が雇われており、彼らの職場における情報保障を担うために手話通訳者も数多く働いている。彼／彼女らの給与は、仕事の内容や経験・地域等で異なるが、概ね$35,000～80,000（350～800 万円）程度とのことである。一方、手話通訳者の中には一つの機関に所属するのではなく、依頼を受けてさまざまな現場に出向くフリーランスの手話通訳者もいる。こうした通訳者の給与は地域によってさまざまで、ボストンのトップレベルの手話通訳者で約$65（6,500 円）／時間、全米の平均では$35（3,500 円）／時間程度とのことである。

４．全国統一カリキュラム作成に対する議論

アメリカでは、前項までに述べてきた統一試験の作成および見直しの他に、各大学で行われている手話通訳養成プログラムの質を均等にしていくため、統一カリキュラムを作成してはどうかとの議論がなされているそうである。しかし、Rico Peterson 先生ご自身はこの動きには強く反対されている。と言うのも、カリキュラムというのはその大学で何をどう教えるかを規定するものであり、この内容は各大学のおかれた状況によって自ずと変わってくるからである。もちろん手話通訳者養成プログラムが満たすべき基準というものは必要である。また、養成プログラムを卒業した学生が達成すべき一定のレベルというのも提示することはできるかも知れない。けれども、そこに到達する道のりは、各大学で違っていてもかまわないというのが先生ご自身の主張である。

※ なお、Rico Peterson 先生ご自身はこの CEU に変わる制度として、定期的にメンターによる指導を受けることを提案しているとのことでした。特に手話通訳経験が長く、指導者の立場にある通訳者ほど、時に自分が学ぶ立場になり他の人から問題を指摘してもらうことが重要との指摘をされていました。

「昔は、手話通訳者というのは地域のデフコミュニティによって育てられ、選ばれてきた」と Rico Peterson 先生は語る。「そういう意味で、以前はデフコミュニティそのものがカリキュラムであったと言える。その時代、誰を通訳にするか、どの通訳者にどんな仕事を頼むかは、ろう者自身が自分の手で決めてきた。自分も何も知らないところからいきなりろう者のコミュニティに飛び込んだ１人だが、毎日、何週間もかけてろう者の中に通う日々の中で、あるときろう者が『あれ、なんて言ってるの？』と自分に聞いてきてくれた瞬間があった。この言葉こそがろう者からもらった“信頼の証”であり、今で言う“手話通訳資格”だったのである。だからこそ自分は、各地域のデフコミュニティのニーズに合致した手話通訳者を育てていく責務があると思うし、地域のニーズに基づいて作られ、地域の中で試行され、地域のろう者によって検証されたカリキュラムこそが、最良のカリキュラムであると信じている。」

講演される Rico Peterson 先生
（12 月 11 日近畿手話通訳問題研究討論集会にて）

【NIC の誕生秘話】

長らく全米統一資格とされてきた RID 資格が廃止され、NIC に変更された経緯について、Rico 先生は昔話風の語りで説明してくれました。以下、その内容です。

―昔々あるところに、とてもすてきな仕事がありました。それは、一つの言葉における意味を別の言葉に変えて伝えるという仕事でした。ろう者の島に伝わるこの仕事は「通訳」と呼ばれ、ろう者の家庭に生まれ育った子どもやろう学校の先生、それに教会の牧師さんなどによって担われてきました。この島の生活はそれはそれは幸せなものでした。

あるとき王様がやってきて、ろうの島の様子を見ました。「ふ～む、この島で行われている仕事はとてもすばらしい。これを国中に広げようではないか。」そして、ろう者の島に伝わる仕事を国中の他の地域でも実施するための法律を作ったのです（ADA 法）。これは、とてもすてきなアイディアではありました。でも、問題は国中の他の地域には、この仕事を担える人たちがいなかったのです。慌てた家来は、王様のところにやってきて言いました。「王様、この国の中には、そのような仕事を担える人材がいません。いったいどうしたらいいのでしょう？」「ふ～む、それなら国中に学校を建てたまえ。そうすれば、たくさんの人がその仕事を担えるようになるだろう。」こうして、たくさんの学校が作られました。

これを聞いたろうの島の通訳者達は言いました。「そうか！これからは僕たちの仲間が国中に生まれるんだ。じゃあ、仲間をつなぐ協会が必要じゃないか。そうだな～全米手話通訳者登録協会（RID）なんてどうだろう！」でも、これを見ていたろう者達は、不安になり王様のところへ行きました。「王様、通訳という仕事はこれまで私たちの島で育てられてきた仕事です。それを学校で育てるなんて、本当に大丈夫でしょうか。」でも、王様は聞く耳を持ちませんでした。「これは大変プロフェッショナルな仕事だ。だからこそ専門的な教育が必要なのだよ。」

こうして、専門職としての手話通訳者は生まれました。それは、それは、かわいい赤ちゃんでした。ろう者達はこの赤ちゃん達の行く末を案じながらも、それでも生まれてきた赤ちゃんを心から愛し、たいそう可愛がったそうです。でも、彼らは心配でした。彼らは「学校」と言うところにいい経験がありませんでした。しかも「専門職」との関わりも必ずしもいいものではありませんでした。けれども、生まれてきた赤ちゃんに罪はない。彼らはそう心に言い聞かせたのでした。

そして月日は流れ、赤ちゃん達は成長しました。18 歳になったとき、家を出ることに決めました。これまでろうの島に間借りしていた家（全米ろう者協会:NAD）を離れ、自分の家を建てることになったのです。ろう者達は悲しみました。これまで通訳という仕事は、常にろう者達の手の中で行われてきました。でも、それが学校に移り、自宅まで離れることになり、置き去りにされたような気持ちになりました。しかし、子ども達はそんなことは気にも留めませんでした。他の同じ年の子どもと同じように、彼らは自分の運転免許をほしがり、自分たちの手で通訳資格を作りました。ろう者達はこれに反対しました。でも、自分の意志で歩み始めた子ども達の動きを止めることはできませんでした。こうして、ろう者と通訳者の気持ちはどんどん離れていくことになったのです。

やがて、ろう者の島の人たちはあんな資格は信用できないと自分たちの資格を作ってしまいました。こうして、世の中には二つの手話通訳資格ができあがる結果となりました。このうち RID の資格は、言語能力や通訳理論、あるいは技能試験によって測られるものでした。一方、NAD で作られた資格は通訳者としての振る舞いを重んじるものでした。これら二つは大きく異なるものでした。

幸いなことにそれからしばらくして、両者は大人になりました。そして、仲を修復するためにカウンセリングを受けることになりました。カウンセラーは言いました。「二つある試験を、一つに統一してみたらどうでしょう？」こうして生まれたのが新しい資格というわけです。ここで生まれた資格は、NIC（National Interpreter Certification）と呼ばれ、広く全米で用いられるようになりました。この資格は、RID のものでもなく、NAD のものでもなく、両者の特徴をあわせ持つ資格となりましたとさ。

【Rico Peterson 先生名言集①】

特別講義の中では、講師である Rico Peterson 先生から手話通訳について厳しくも温かい言葉をたくさんいただきました。いずれも通訳という仕事の本質をついたすばらしい表現ばかりだと思いますので、こちらで紹介させていただきます。

「手話通訳者の中には 2 種類のタイプがいる。少しずつ上手くなっていく通訳者と、少しずつ技術が落ちていく通訳者である。どちらにも属さず、ずっと一定の技術を保っている通訳者なんていない。良くなっているという実感がなければ、それはすなわち悪くなっている証拠である！だからこそ生涯勉強の姿勢が求められる。」

「学生は常に正解を求め、間違いを嫌う。でも、同時通訳というのは根本的に間違いを避けられない仕事で、起こった間違いにどれだけ上手く対処できるかが問われる。だから、学生には最初から間違いを恐れない姿勢を育てていく必要があると思う。」

「通訳というのは、そもそも現実的に不可能な作業である。他人の話の意図をくみ取って、他の言語に変え、もう 1 人の人に伝えるわけだから、当然その過程で意味のすれ違いが生じてもおかしくない。ましてや言語として表出された語句が、必ずしもその人の意図を表しているとは限りらないし、そこから通訳者が何とか意図をくみ取って言葉を発したとしても、それが受け手に正しく伝わるとは限らない。さらに、話し手と受け手は互いに異なる文化や価値観を持った人間で、なおかつ同時通訳には厳しい時間的制約が課せられるわけだから、これを完璧にやってのけること自体不可能な話。私は妻と何年も生活をともにしてきたが、未だに彼女のことを理解できない（汗）。なのに、見知らぬ他人同士の意図を正確に通じ合わせるなんて（笑）。通訳というのは、そのぐらい難しい作業だと言うことを肝に銘じておかねばならない。」

「手話通訳者というのは、往々にしてその場の通訳が正確に行われているかを正しく評価できる唯一の存在となる。だからこそキチンと自分の通訳で互いが通じ合っているかモニターしなければいけないし、自分の技術に誠実でなければならない。」

「手話通訳者としてのキャリアを考えるとき、結婚や出産と言った女性がもつ悩みを無視することはできない。英語に Glass Ceiling（ガラスの天井。見えない障壁があるという意味。）という表現があるが、見えていないのは男性だけで、女性にとってははっきりと目に見える障壁があるはず。アメリカでも手話通訳者の 80%は女性。だから、女性の悩みはこの業界全体の悩みとしてとらえていく必要がある。」

アクセスサービスの重要性について熱く語る Rico Peterson 先生（12 月 10 日同志社大学にて）

ノースイースタン大学における手話通訳者養成

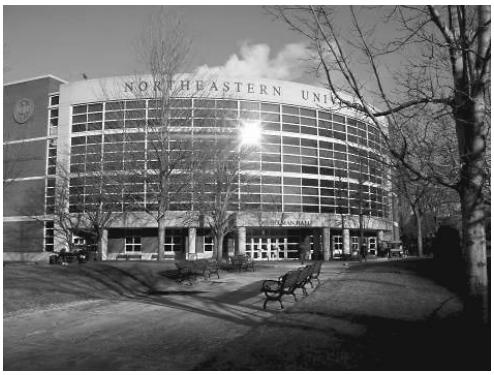


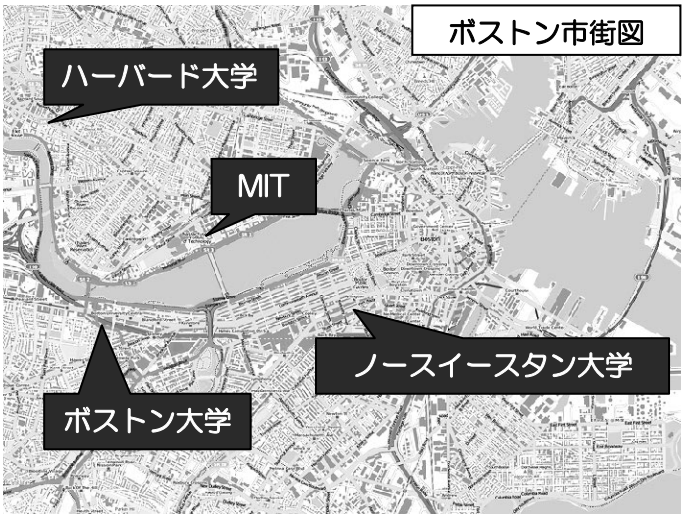
写真　ノースイースタン大学

１．ノースイースタン大学（Northeastern University）

Rico Peterson 先生が教鞭を執られているノースイースタン大学は、マサチューセッツ州ボストン市にある私立総合大学である（全学生数約 25,000 人）。この地域はイギリスからの清教徒が初めてアメリカに降り立った場所として知られており、今でもアメリカ発祥の地として、北東部ニューイングランド地方の中心的役割を担っているそうである。また、世界の英知が結集する学園都市としても有名な地域で、ノースイースタン大学の周辺には、かのハーバード大学をはじめ、多数のノーベル賞受賞者を輩出してきたマサチューセッツ工科大学（MIT）、ボストン大学など、名だたる大学が軒を連ねている。ノースイースタン大学もこうした大学と肩を並べるようなハイレベルの私立総合大学で、年間約＄45,000（約 450 万円）という学費の高さからもそのエリートぶりがうかがえる。

図上　マサチューセッツ州ボストン市の位置

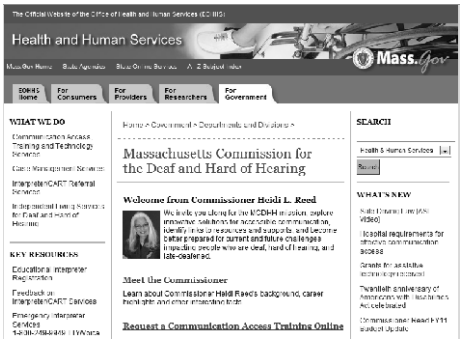
一方、ボストンには 200 年以上の歴史を持つデフコミュニティが存在する点でも特徴的である。そのため、長年のろう者の運動によって作り上げられた質の高い手話通訳認定・研修・派遣制度が存在し、学生達は常にハイレベルの手話通訳者に囲まれて大学生活を送ることになる※。同時に高いレベルの技術を持った後輩通訳者を育てていくことにも熱心な地域で、実際の通訳現場で先輩が後輩を実



図下　ノースイースタン大学とその周辺大学

※ なお、学生の多くはボストンを含むニューイングランド地方から入学してくるそうである。それ以外の地域から入学してきた学生でも、卒業後はこうした恵まれた環境にあるボストンに残りたいとの想いを持つとのことである。

地指導していくメンターの制度についても広く認知されている土地柄であるとのことである。さらに、通常アメリカでは民営のエージェントが中心となって手話通訳者の派遣等を行っているが、ボストンは全米でも珍しく州の助成を受けたろう者・難聴者協会（Massachusetts Commission for the Deaf and Hard of Hearing）がこうした制度を担っており、長年培われてきたデフコミュニティの確固たる基盤に基づき質の高い手話通訳制度が行き渡っている土地ととらえることができるだろう。



Massachusetts Commission for the Deaf and Hard of Hearing http://www.mass.gov/mcdhh
手話通訳者の認定や研修、派遣の他、文字通訳の派遣、情報保障を利用するための助成金を提供したり、補償技術の利用に関するコンサルタント、ろう・難聴者への相談対応等を行っている。

Mission Statement
The American Sign Language Program is dedicated to preparing individuals who can interact in a positive and supportive manner with members of the American Deaf Community. The Program does this by providing a wide array of course offerings as well as volunteer, internship and practicum opportunities.
For students pursuing a dual major in ASL Studies and another academic discipline, the Program is committed to enabling them to integrate their communicative competence and socio-cultural knowledge in order to work positively with the Deaf Community in a variety of meaningful roles.
For students taking American Sign Language in fulfillment of their university language requirement, the Program is committed to providing the communicative competence and cultural sensitivity needed to interact successfully with members of the American Deaf Community.

教育理念（抄訳）
ASL プログラムは、アメリカのデフコミュニティの人々と積極的かつ協力的な関係を築くことのできる人物を育てることを目的としている。本プログラムでは、この目的を達成するために、多くの授業の他、インターン、ボランティア体験、実習の機会を提供する。
ASL コースのほかに他コースを兼専攻する学生に対して、本プログラムでは、デフコミュニティの中でさまざまな意義ある役割を担えるだけの十分なコミュニケーション能力と社会・文化的知識を授けることを誓う。
また、大学が課す語学の単位として ASL を取得する学生に対しては、アメリカのデフコミュニティの人々と良好な関係を築くのに不可欠なコミュニケーション能力と文化的感性を授けることを約束する。

（抄訳は吉川あゆみ（2008）より転載 一部改）

2. ノースイースタン大学手話通訳者養成課程の概要

1）ノースイースタン大学手話通訳者養成課程の教育理念

教育理念（Mission Statement）は、大学のカリキュラムにとって最も重要な柱で、背骨あるいは中枢神経系とも言えるものである。ノースイースタン大学手話通訳養成課程の教

育理念には、「デフコミュニティへの貢献」という目的がはっきりと明示されており、そのために種々の授業や社会的体験を提供するのだという姿勢が示されている。裏を返して言えば、ここに質の高い手話通訳者を養成することを掲げていない点でも特徴的である。すなわち自分たちの使命はまずデフコミュニティに積極的に入っていける人材を育てることであり、それが結果的に質の高い手話通訳につながるとの姿勢が読み取れる部分と言える。

一方、二段落目には兼専攻（Dual Major）の学生に対する記述が明示されている点も特徴的である。アメリカの大学では、自分の所属するコース以外に二つ以上のコースを選択し、卒業することがある。これを Dual Major と言うが、ノースイースタン大学ではこれを積極的に推奨している。というのも、手話通訳というのは誰もができる職業ではないからである。日本の手話通訳養成課程と同様、ノースイースタン大学でも手話通訳者養成コースに入ってきた学生の中で、どうしても手話通訳者には向かないタイプの学生がいる。そのため手話通訳専攻の中には、手話通訳者養成コースの他に手話学＆心理学、手話学＆演劇、手話学＆ヒューマンサービスなどのコースが用意されており、手話通訳者にはなれない学生であっても、それまでに費やした「時間とお金、そして流した涙」を無駄にしないよう最大限の敬意が払われている。なお、このように進路変更を余儀なくされる学生の数は、毎年 2～4 名程度とのことである。

学生に進路変更をうながすことは、教員にとってもとても痛みをともなうものと Rico Peterson 先生はおっしゃいます。でも、デフコミュニティへの貢献を何より重視するノースイースタン大学では、十分な技術を持たない学生を通訳者として輩出していくわけにはいかないと考えています。そのため、学生に対しては主に 2 年間の ASL 学習を終えた段階でカウンセリングを行い、必要によっては他の職業分野にも目を向けるようううながすのだそうです。この際重視するのはコミュニケーションスキル。手話や通訳の力は、いつどんな風に伸びていくかわかりません。けれども、対人コミュニケーションスキルの乏しさは、手話通訳者として活動する上で大きな障壁となります。こうした学生に対しては、教員が 1 対 1 で向き合い、まずは何が問題なのかを考えさせ、難しいようなら他コースを進めるようにしているそうです。なお、通常手話通訳者養成課程の卒業率は 10%程度と非常に低いそうですが、ノースイースタン大学ではこうした Dual Major 制度のおかげで 55%と高い卒業率を保っているそうです。

２）教育課程の概要と入学試験

ノースイースタン大学における手話通訳者の養成課程は、人文社会学部（College of Social Sciences and Humanities）の中に置かれた異言語・異文化学科（Department of Languages, Literatures, and Cultures；直訳では言語・文学・文化学科）の 1 専攻として設置されている。ここには、手話通訳とスペイン語の 2 つの主専攻が置かれている他、副専攻としてフランス語、アラビア語、中国語、イタリア語、日本語などさまざまな言語を学ぶことができる。

手話通訳主専攻（ASL/English Interpreting）に入学する学生の定員は 18 名で、一学年の学生数が 12 名を超える場合には、2 クラスに分けて指導を行う。また、教員は 10 名（専任 5 名、非常勤 5 名）で、うち 5 名はろう教員（専任 3 名、非常勤 2 名）とのことである。

入試は、高校までの成績から割り出される評定平均（GPA）と、大学入試共通試験（SAT）および小論文によって判定される形となっており、ASL の技術は評価対象となっていない。

そのため、ゼロから ASL を学ぶ学生と、すでにある程度学習経験がある学生が入り交じる結果となっている。しかし、いずれの場合も新学期はじめのプレイスメントテストによって現時点での ASL の力が評価され、習得済みのレベルの授業については免除されるため、どの段階の学生であっても実力に応じた手話学習ができる仕組みとなっている。ただし、ノースイースタン大学で課されている ASL の力のレベルは他大学に比べて大変高く設定されているため、既に ASL を学んだ学生であっても、手話の授業をすべて免除されるケースはごくまれとのことである。なお、入試倍率は約 2 倍程度で、例年 35 名程度の受験者がきて、その約半数にあたる 18 名が合格するそうである。

3)カリキュラム構成

ノースイースタン大学手話通訳者養成課程におけるカリキュラムは、次ページ表のように示される。このうち、学士取得に必要な教養系科目はほぼ 1～2 年次のうちに取得できる形となっており、3～4 年次にはほぼ専門科目のみに集中して学習することが可能となっている。また、1～2 年次は手話そのものやろう文化についての学習が中心となっており、通訳技術については手話が十分に身についた後の 3 年次に導入されている点も特徴的である。以下、1 年次より順に特徴的な科目について説明する。

(1)1～2年次のカリキュラム—手話学習

①Deaf People in Society（社会の中のろう者）

1 年次の一番初めに履修する授業が、この「社会の中のろう者」である。これは、ろう者の歴史やコミュニティについて学ぶ授業で、すべてろうの教員が読み取り通訳を用いて講義を行う。また、地域のデフコミュニティから数多くのろう者をゲストとして招き入れ、学生達がなるべく早いうちから多様なろう者像に触れられることを心がけている。ここでは、ろうの弁護士や医師、芸術家、エンジニアの他に、仕事を持っていないごく普通のろう者にも来てもらい、彼らの使用する言語や好み、文化的背景の多様性を学ばせている。

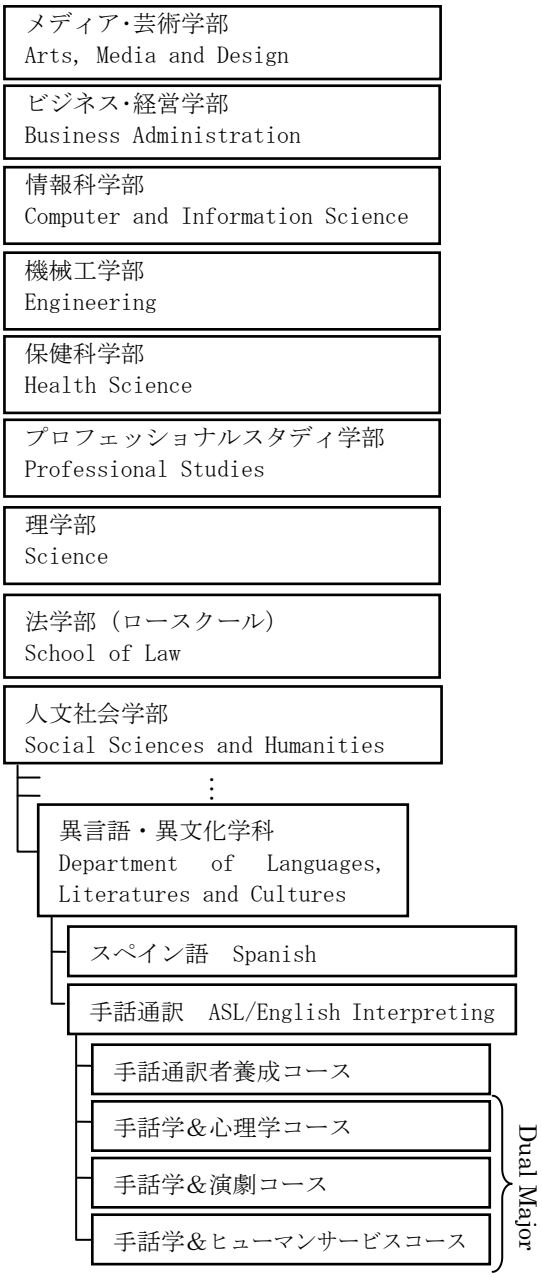


図　ノースイースタン大学の学部編成

表　ノースイースタン大学手話通訳者養成課程におけるカリキュラム

学年	Fall Semester 前期	Spring Semester 後期
Year One １年次	Deaf People in Society：社会の中のろう者 Elementary ASL 1：初級 ASL 1 College:An Intro：フレッシュマンセミナー ENG111 College Writing：テクニカルライティング	Elementary ASL 2：初級 ASL 2 Core Elective：主要選択科目 College Mathematics：数学 Elective：選択科目
Year Two ２年次	Deaf Culture/History：ろう文化と歴史 Intermediate ASL 1：中級 ASL 1 Introduction to Linguistics：言語学入門 Core Elective：主要選択科目	Intermediate ASL 2：中級 ASL 2 Linguistics of ASL：手話言語学 Elective：選択科目 Elective：選択科目
Middler Year 中間年		
Year Three ３年次	Introduction to Interpreting：通訳入門 Interpreting Inquiry Texts：質問的談話通訳 Middler Year Writing：中間年報告 Advanced ASL 1：上級 ASL 1 Elective：選択科目	Interpreting Narrative Texts：物語的談話通訳 Performance Interpreting：演劇通訳 Advanced ASL 2：上級 ASL 2 Elective：選択科目 Elective：選択科目
Year Four ４年次	Interpreting Expository Texts：説明的談話通訳 Ethical Decision-Making：倫理意思決定 Ethical Fieldwork：倫理フィールド実習 Research Capstone：卒業研究 Elective：選択科目	Interpreting Persuasive Texts：説得的談話通訳 Interpreting Practicum：通訳実習 Elective：選択科目 Elective：選択科目

表のうち網掛けは手話実技クラス、囲みは通訳実技クラスを示す
（吉川あゆみ（2008）より転載　一部改）

②ENG111 College Writing（テクニカルライティング）

論理的に英語を書く力を伸ばすための授業で、学生には最も「不人気」の科目とのことである。ノースイースタン大学は、元々学生のリテラシー（読み書き能力）向上に非常に力を入れており、この授業に限らず４年間を通してたくさんの課題を読んだり書いたりすることが求められる。これは、手話通訳養成課程でも例外ではなく、通訳の基盤となる英語の力を伸ばすため、他大学に設置された手話通訳養成プログラムとは比べようもないほど何倍も多くの読み書き課題が課されているとのことである※。

なお、授業の中では、あるテーマに基づき自分で内容を調べてレポートにまとめたり、特定の文献を読んで要約するなどの課題が課されるそうである。

③Deaf Culture/History（ろう文化と歴史）

2 年次では、1 年次に履修したろう文化に関する学習をより発展させ、特定のトピックについてより深い講義を行う。ここでは「1870 年トーマス・ギャローデットがアメリカ初のろう学校を設立した」といった一般的なろう者の歴史について学ぶと同時に、「皆もよく知っているメアリーの家系は代々続くデフファミリーで、隣町でろう学校の校長をしているマイケルと結婚してジャクソンが生まれた」など、地域のデフコミュニティの歴史につ

※ Rico Peterson 先生ご自身も「手話通訳者には高いリテラシーとアカデミックスキルが必要！」と主張されている方のお１人で、読み書き能力の他に「正しく聞ける力」「論理的に話せる力」の重要性を強調しておられました。

いても学ぶ内容となっている。こうした知識は、以前はデフクラブの中で自然に伝承されてきたものである。しかし、近年デフクラブの減少により得られる機会が少なくなってしまったため、そこで行われていたことをそのまま教室の中で扱うことにしているとのことである。

文化というのは、手話を学び始めてまもない学生にとって非常にとらえづらい概念です。それは、アメリカの大多数の学生であっても同じだそうで、マジョリティである限りほとんど文化を意識することなく生活をしてきていることが多いそうです。特に「聴文化」との対比で「ろう文化」を教えることは非常に難しく、学生にとっても理解しづらいと話されていました。その理由として Rico Peterson 先生は次のように述べておられます。

「ろう者とともに行動をしていると、聞こえる学生は自分が聴者であることを意識します。でも、ひとたびろう者から離れると「自分は聴者である」との感覚を持つことはありません。つまり、「聴者」というのはろう者と対峙したときに生まれてくる概念だと言うことがわかります。同様に「聴文化」というのも、「ろう文化」に対して「それ以外の文化」という意味合いで提示されるもので、単独で存在するものではありません。ろう者の目で外の世界を見たときに見えてくるのが「聴文化」であり、「ろう者」あるいは「ろう文化」がなければ「聴文化」も存在し得ない訳です。」

「これは聴者（ろう者に対して聴者と同定される人達）の日々の生活からも伺うことができます。例えばろう者は自分がろうであることにアイデンティティを感じ、さまざまな場でろう者に対しても聴者に対しても「自分はろうです」と紹介をします。でも、聴者の場合はデフコミュニティの外の一般的な生活の中で「自分は聴者です」と同定し、紹介することはないでしょう。これはすなわち、聴者としてのアイデンティティというものも、ろう者なしに単独では存在し得ないことを表していると言えます。」

「一方、アメリカに在住するイタリア系アメリカ人やアフリカ系アメリカ人には確固たる文化が存在します。これらはろう文化と非常に似た側面を持ち対等に比較が可能なものです。これに対して「聴文化」はそもそもろう文化がなければ存在し得ない文化ですから、同列に並べて扱うことのできないものだと考えられます。」

では、学生がろう文化というものを理解するために、ノースイースタン大学ではどのような指導をしているのでしょうか？Rico Peterson 先生は、ろう文化を理解する際に必要なのは、聴文化について考えることではなく、そもそもろう文化がどのようにして生まれてきたかを理解することだとおっしゃっています。

文化というのは、人間が「自然界（Nature）」に対峙し、それをコントロールしようとした時に生まれてくるものと定義づけられます。すなわち、人間がこの世に生まれ、彼らを取り巻く「自然界」の中で生き延びようとした結果、生まれてきたものが文化というわけです。ですからろう文化を理解しようと思ったら、まずろう者にとっての「自然界」すなわちろう者を取り巻く環境や現状が一体どういうものだったのかを肌で感じ、理解しなければなりません。ろう者がこれまで生きてきた歴史の中で、彼らを取り巻く「自然界」というのは、数え切れないほどの差別にあふれていました。「聴覚障害があるからできない」と不条理にチャンスを奪われ、十分な教育機会が得られなかったがために本来得られるはずの可能性をそがれ、そして彼らが大切にしている価値をことごとく軽視する、そんな環境の中で彼らは生きてきたわけです。ですから、手話を学ぶ我々は友人が、愛する人が傷つく姿を目の当たりにして、こうしたろう者の痛みや苦しみをともに感じて、初めて、「ろう文化」がどのようにして生まれてきたのか、なぜ彼らがそれをこれほどまでに大事にしていかねばならなかったのかを理解することができるでしょう。こうしたろう文化に対する考え方は先生ご自身も長年の経験の末たどり着いたものだということですが、手話学習者あるいは手話通訳指導者として、我々もぜひ知っておくべきとらえ方だと思います。

④Elementary ASL 1 ～2／Intermediate ASL 1 ～ 2

いずれも ASL の実技科目で、週 4 コマ（1 コマ 3 時間）開講されている。どの授業も ASL 指導者協会（ASLTA）の資格を有するろう講師が担当しており、じっくり時間をかけて ASL の学習ができるよう構成されている。また、授業の課題として地域のデフコミュニティに

出向き、コミュニティのろう者とふれあう時間（15～30 時間）を取らなければならないなど、ネイティブのろう者から直に手話を学ぶことの重要性が強調されている※。

（2）中間年（Middler Year）―デフコミュニティへの留学

2 年次を修了した学生の多くは、3 年次に進んでの手話通訳に関する授業を取得する前に、一度大学を離れ、半期または 1 年間デフコミュニティに「留学」して手話の学習を行う。これは、ノースイースタン大学で強く推奨されている学習方法で、手話通訳者養成課程に限らず他の学科でも、この間に他国に留学したり、企業で働いて社会経験を積むそうである。Co-op（Cooperative Education）と呼ばれる制度などを利用して行われるこの学習は、100 年以上も前からノースイースタン大学で用いられている方法で、実に 90%以上の学生がこうした中間年（Middler Year）の経験を経て卒業していくそうである。

手話通訳者養成課程の学生の場合、この中間年をろう者に関係する施設で、いわば「手話修行」にあてる。その行き先は学生によってまちまちであるが、典型的な例としてはギャローデット大学に行き、3～4 年次で取得すべき選択科目を先取りする形で取得するとともに、ろう者との多様なコミュニケーション体験を通して生きた手話を学習するとのことである。なお、ギャローデット大学で取得した単位はノースイースタン大学の選択科目に振り替えが可能なため、このような過程を経ることで 3～4 年次は残りの専門科目すなわち手話通訳の学習に集中して取り組むことができる。

「本当の手話は教室では学習できない！」これは Rico Peterson 先生が繰り返し強調しておられた点でした。アメリカのような体系的な養成課程を持たない日本にいる私たちは、「もっと良い指導ができれば良い通訳者が育つはず！」と思いがちです。でも、本当にフランス語を学びたければフランスへ留学する、スペイン語を学びたければスペインへ留学する、手話を学びたければデフコミュニティへ留学する、これはすごく当然のことなのでしょう。もちろん体系化された教育システムは、通訳者の養成に何倍も拍車をかけるものと思われますが、教室はコミュニティの代替品にはならないということは、肝に銘じておくべき点だと思います。

（3）3～4年次のカリキュラム―手話通訳学習

① Interpreting Inquiry Texts（質問的談話通訳）／Interpreting Narrative Texts（物語的談話通訳）／Interpreting Expository Texts（説明的談話通訳）／Interpreting Persuasive Texts（説得的談話通訳）

手話通訳の技術を学習する一連の実技科目である。通常、アメリカの手話通訳者養成課程では、はじめに ASL のスキルを身につけたあと、手話から英語、英語から手話の翻訳、逐次通訳、同時通訳を順に学習していくカリキュラムがとられている。これは国際会議等での同時通訳を目標においた音声同時通訳者の養成手法を元に作成されたカリキュラムである。一方ノースイースタン大学では、こうした養成方法は必ずしも手話通訳現場で求め

※ なお、学生達をコミュニティに連れ出すための方法として、ろうの教員が自分が参加するコミュニティのイベントに学生を誘い、地域のろう者に学生を紹介したり、積極的にイベント情報を伝えるなどの工夫を行っているとのことでした。

られるニーズとは合致していないとの考えから、卒業後学生達が活躍する現場の状況を分析し、そこで求められるタスクに応じたカリキュラムを構成している。

カリキュラムの構成にあたっては、まずマサチューセッツ州の手話通訳者派遣を一手に引き受けているろう・難聴の協会に協力を依頼し、大学を卒業した手話通訳者がどのような現場で通訳活動を行っているのかを分析したそうである。特に、大学を卒業後 2 年以内に派遣されている現場（21,000 件／2 年間）を調べたところ、その内容は大きく 4 つ（①1 対 1 の簡単なやりとり、②経験談などが話される講演・会議等、③より複雑な講義・研修等、④裁判等の交渉や政治・宗教関連の演説等）に大別されることがわかった。このうち、最も多いのが職場面接や福祉関連の手続き、病院の問診といった①にあたる通訳で、全体の 70%を占めていた。これに対して②や③は初心者段階では依頼を受けることが少なく、④になるとほとんど担当することがなかったそうである。

そこで、こうした場面への対応が可能な手話通訳者を育てるため、談話構造（ディスコース）の複雑さに着目した、現在のようなカリキュラムが作成されたとのことである。談話とは、一定の長さを持つ話し言葉のまとまりで、質問的談話、物語的談話、説明的談話、説得的談話と進むにつれて、その構造が複雑になることが知られている（下表参照）。子どもの談話獲得の段階もちょうど同じような発達過程をたどり、最も早期に獲得される質問的談話が、通訳内容でいうと 1 対 1 の簡単なやりとり、すなわち大学を卒業して間もない手話通訳者達が真っ先に直面する通訳場面と共通しているとのことである。さらに、物語的談話から説得的談話の各段階も、通訳内容では②から④に対応する形となっており、これらすべてを教育課程に組み込むことで、卒業生が実際に社会で求められている手話通訳技術を身につけられるようカリキュラムを構成しているそうである。

表　談話の種類と段階

種類	内容
質問的談話 Inquiry Texts	窓口での会話や福祉手続き、病院の検診など、名前や住所を尋ねるような簡単なやりとり。子どもの場合、３～４歳になってある程度言葉が話せるようになると、何度も繰り返し「これ何？」「あれ何？」と聞くようになる。その際の簡単なやりとりがちょうどこの段階にあたる。用いられる文章は比較的短く、文レベルであることが多い。
物語的談話 Narrative Texts	自己紹介や個人の経験談を話す講演会、PTA の集まりなど、ある程度まとまったストーリー性のある話。ちょうど５～６歳の子どもが「もっと話を聞かせて！」と物語を聞くことをせがんだり、幼稚園や友達の間で体験したことをいろいろと話したがる時期にあたる。文章の長さは質問的談話よりも長くなり、文章レベルから談話（ディスコース）と呼べる段階に発展する。
説明的談話 Expository Texts	大学講義や研修会、料理のレシピや道順の説明など、相手が知らない物事について筋道を立てて説明する話。子どもの場合、８～９歳ぐらいになると「ねえ、知ってる？」と得意げに自分の知っている知識を語りたがる。この段階が説明的談話で、物事を順序立てて説明したり、複数の項目を整理して語る技術が求められる。
説得的談話 Persuasive Texts	裁判や交渉、政治・宗教的演説など、相手の心を動かし、戦略的に誰かを説得するような話。子どもの場合は高校生ぐらいになって「車を借りたい」と親を説得するような段階がこれにあたる。説得的談話では、これまでに獲得してきた質問・物語・説明的談話のすべての技術を効果的に用いることが求められ、ディスコースとしては最も複雑な段階となる。

前ページの表はこの段階を説明したものであるが、これらはすべて独立したものではなく、物語的談話には質問的談話が、説明的談話には質問・物語的談話が、説得的談話には質問・物語・説明的談話がそれぞれ含まれているということである。そのため、学生はもっともシンプルな談話構造から練習を始めて、段階が進むにつれそれまでに学習した技術を応用しながら徐々に新たな技術を追加していくことになる。

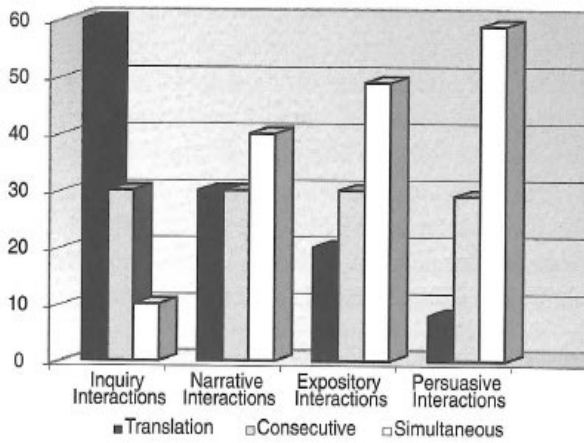


図 各段階で用いられる通訳スキル(Cokely, 2005)

また、従来の手話通訳養成課程のカリキュラムでは、翻訳や逐次通訳、同時通訳、あるいは読み取り通訳や聞き取り通訳といった通訳形態を別々に分けて扱うのに対して、通訳形態を通訳上のストラテジーとして必要な場面で必要な方法を用いるように伝えている点でも特徴的である。実際、学生達が卒業後すぐに求められる 1 対 1 の通訳場面では、読み取り通訳と聞き取り通訳、さらには逐次通訳と同時通訳を同時に織り交ぜながら用いていく力が必要とされる。そのためカリキュラム内でもこうした技術を並行的に扱い、場面に応じて自由に取り入れられるよう指導しているとのことである。

なお、上図は談話の各段階で取り入れる翻訳、逐次通訳、同時通訳の割合を示したものである。これを見ると、はじめは翻訳に重きを置いて指導し、徐々に同時通訳の割合を増やしているのがわかる。一方、逐次通訳はどの段階でも同じ割合だけ指導に入れられており、手話通訳の指導上重要な項目ととらえられていることがわかる。

② Advanced ASL1（上級 ASL1）／Advanced ASL2（上級 ASL2）

中間年で身につけてきた手話技術を 3 年次でさらに磨き、上級レベルへと引き上げるための科目である。一般的な手話通訳者養成課程では、２年間手話の実技を行えばそれで終わりという例が多いが、ノースイースタン大学ではさらに上の手話技術を目指して３年次にも一連の手話実技科目をおいているとのことである。このうち上級 ASL1 は、中間年でさまざまなろう者に触れてきた学生達が教室に戻ってきてはじめて受講する手話実技科目になる。そのため、学生達は教室で習った手話と実際に地域で目にした手話の違いについて矢継ぎ早に教員に質問するそうである。中には「裏切られた（笑）！」とまで言う学生もいるようで、言語の多様性を肌で感じてきた学生の成長を目の当たりにできる非常に喜びあふれる授業になるとのことである。

一方、上級 ASL2 は先に述べた物語的談話の通訳（Interpreting Narrative Texts）と並行して開講されている。手話指導にあたるろう教員と通訳指導にあたる聴教員は連携して

同じような内容の題材を用い、ASL2 で学んだ手話表現を応用して通訳練習ができるようあえてこのように構成しているとのことである。

③ Performance Interpreting（演劇通訳）

演劇のトレーニング方法を用いて通訳技術の底上げをねらう授業で、内容は主に二つに分かれる。

一つ目は発声や発音・発話あるいは舞台上の立ち居振る舞いといった基本的な動作に関する学習であり、演劇の基本トレーニングを用いて学習する。この中では、通訳直前のリラクゼーション方法に始まり、呼吸法や発声法・姿勢等について学ぶほか、手話および英語のパブリックスピーキングを通して人前で通訳をする際に必要な基本技術を獲得していく。

写真　ノースイースタン大学での
演劇通訳の授業の様子

二つ目は、翻訳を通した表現力の学習である。詩やイディオムなどのフローズンテキストの翻訳を通して、手話と英語の構造上の違いに着目するとともに、より豊かな表現力を身につけていく。ここでは、イディオムからポエムへとだんだん文章を長く複雑にしていくが、その際、学生達の隠れたニーズとして歌を手話で表現したいという声がでてくるそうである。実際、学生達に自分の好きな文章を選んで手話に翻訳する課題を提示すると、多くの学生は歌を題材に選んでくる。しかし、この歌の良さを翻訳によって伝えようとすればするほど、歌を手話で表現することのナンセンスさがわかり、最終的にはろう者がなぜこれを受け入れないのかを理解するとのことである。これについては、はじめからろう者の意見を伝えるような方法も考えられるが、教員がいくら止めようとしても学生達はやりたがることがわかったので、今は好きに試させてその過程で学習させる方法をとっているとのことである。

演劇通訳の授業は、以前訪れた視察の際に見学させていただいた授業の一つでした。視察に行くまでは、なぜ通訳トレーニングの初期段階に演劇通訳が入っているのか、いまいち重要性が理解できなかったのですが、実際に授業の様子を見せていただくとその効果は一目瞭然でした。ちょうど見学させていただいた回では、詩を手話に翻訳する課題を学習していたのですが、詩の本当の意味を伝えようとすると英語の文章を何度も読み、内容をとらえて手話に翻訳しなければなりません。また、英語の美しさを伝えるためには、手話でもその美しさを表現しなければなりません。そうすると、自ずと文章にとらわれない「映像的な表現（言語学的には CL 構文）」が求められ、ロールシフトや CL・NMS といった聴者の最も苦手とする表現が集中的に鍛えられるわけです。この授業はまさにこうした表現力の向上と手話における弱点克服、および起点談話の構造にとらわれない翻訳力の向上をねらったものだということがわかります。

加えてこの授業には演劇のプロフェッショナルである Rico Peterson 先生と、手話学の専門家である Dennis Cokely 先生が指導にあたられていて、このお 2 人のコンビネーションは大変見事なものでした。お 2 人のうち、Rico Peterson 先生はさすが元俳優とだけあって、学生の表現したい思いを上手に引き出し、それを ASL という手段に乗せておられましたし、Dennis Cokely 先生は手話学の権威とあって、学生のロールシフトの間違いや CL で用いられる手型の制約等を言語学的に的確に指摘していかれます。さらに学生から「この詩で使われている『韻』を手話で表現したい」などの声が出ると、「アメリカ手話での韻は、このような点に現れる」との解説が加えられ、手話指導における科学的視点の重要性が非常によくわかる授業でした。

このほか、Rico Peterson 先生と 1 週間行動をともにさせていただき、先生の演劇というバックグラウンドがいかに現在の仕事に効果的に働いているかを知ることができました。まず、演劇の基本は観察眼とのことですが、人の特徴をとらえまねて表現する技術は、学生指導の際に「ここが悪い」と実際にやってみせたり「こうすると良い」とモデルを示す際にすばらしく効果を発揮していました。また、他の手話通訳養成課程ではあまり指導されることのない発声法なども、人に届く声の出し方という点で手話通訳者には非常に重要な技術ですし、それを指導できるスキルも指導者には必要なのだと感じさせられました。そして何より、先生ご自身の声の響きやパフォーマンスのすばらしさは、見ている人を飽きさせない非常に大きな魅力となっており、演劇と手話通訳、あるいは通訳指導との意外な共通点を発見させられる一幕でした。

④ Ethical Decision-Making（倫理意志決定）／Ethical Fieldwork（倫理フィールドワーク実習）

4 年次の前期に力を入れているのは、さまざまな場面で適切な倫理的判断を下すための学習で、二つの科目が設定されている。倫理意志決定（Ethical Decision-Making）ではまず倫理とは何かを理解するために、アリストテレスやカント、定言命令といった古典哲学について学習する。その上で、手話通訳者が行っているさまざまな意志決定に目を向けさせ、どの場面でどんな決定を下しているのか、その決定が通訳の成否や通訳後の状況にどのような影響を及ぼしているのかを考えさせる。

一方、倫理フィールドワーク（Ethical Fieldwork）では、エスノグラフィの手法を用いて手話通訳者の「語り」を分析し、手話通訳者がどのような立場で物事を考えているのかを学ぶ。この授業では、はじめに実際の手話通訳場面を観察し、手話通訳者の行動を記録するとともに、それぞれの場面で手話通訳者がどんな風に考えてそのような行動をとったのかヒアリングさせる。その上で、より詳細な調査方法について学習し、客観的研究手法に基づいて質問リストを作成した後に、手話通訳者へのインタビュー調査を実施・分析・発表するとのことである。

【Decision Maker（決定権保持者）としての手話通訳者】

手話通訳者を Decision Maker としてとらえているのもノースイースタン大学のカリキュラムの特徴です。手話通訳者は、通訳依頼を受ける段階から、実際の通訳の間、通訳後、さらにはプロの手話通訳者として研鑽を続けていく過程において、ありとあらゆる決断に迫られる存在と言えます。たとえば、通訳依頼を受けるかどうかを決めるのも通訳者自身の決定であり、それ以前に、自分はこの依頼を受けて良いかどうか判断し得る情報を持っているかを見極めるのも通訳者自身の決断によるものです。また、実際に依頼を受けることになっても、その依頼に対してどのような準備をするか、どうやって準備をするか、主催者に問い合わせるか、自分でインターネット等で調べるか等、一つ一つの行動を決定することが求められます。さらに実際の通訳現場に着いた後も、通訳が始まる前の時間をどのように利用するか、話者や対象者にはいつどのタイミングで挨拶に行くか、打ち合わせ時間をどう使うか等、判断を迫られる局面は多数

ありますし、通訳中にはどの単語を選択するか、訳しづらい文章をどう訳すか、聞き取りづらかったときに聞き返すか、聞き返すとしたらどんな方法で聞き返すかなど、行動の一つ一つがすべて通訳者の手にゆだねられているわけです。

したがって、学生達には 4 年生の段階で自分たちが行っているさまざまな決定を振り返らせ、リスト化させる作業を行っているそうです。この結果作成されたリストには、実に 250 以上もの項目が並んでいます。これら一つ一つの決定に基づく結果が、一つの手話通訳依頼の結果を導くものであり、学生にはこの重要性を認識させるよう指導しているそうです。

⑤ Research Capstone（卒業研究）

秋学期から春学期の 1 年間をかけて行う卒業研究のことである。ここでは一般的な卒業研究と同様に研究目的を設定して、先行研究のレビューや実際の研究・分析を行い、結果に基づく考察を行う。最終的な発表は春学期の最後になるが、その準備に向けて秋学期に授業を設定している。通常の大学で行われている卒業研究と何ら変わるものではないが、手話通訳養成課程でこれが課されることは珍しく、手話通訳を多角的に分析する視点を育てようというノースイースタン大学の想いが見て取れる。

手話通訳研究の第一人者として世界的に有名な Dennis Cokely 先生がいらっしゃるノースイースタン大学では、手話通訳の研究と教育、カリキュラム改善等に役立てるため、さまざまな手話通訳場面の録画ビデオをアーカイブ化し蓄積しているそうです。

この中には、各通訳者の技術を比較分析できるよう、同じ素材に基づいて複数の手話通訳者に通訳をしてもらったビデオも多数蓄積されていて、学生達の研究教育にも利用できるようになっているとのことです。また、毎年同じ素材を用いて卒業間際の学生の通訳状況を録画蓄積したものもあり、数年分を比較検討することでカリキュラムの改善や卒業時の学生のレベル向上に役立てたりもしているそうです。さらに、数年前からはニューヨーク州のいくつかの大学との共同研究により、同様の手法で複数の大学の手話通訳養成課程の学生の卒業時の様子をビデオに録画しているそうで、これらの比較検討により大学間の差異や特徴を把握しているとのことでした。このほかに、同様の素材を用いて、卒業から 10 年目の通訳者、9 年目の通訳者･･･とさかのぼって撮影をし、大学を卒業した手話通訳者がどんな風に成長していくのかを追いかけたデータベース等も作成しているとのことで、さすが全米を代表する最高峰の手話通訳者養成・研究機関！と感じざるを得ませんでした。

右：Dennis Cokely 先生
左：Rico Peterson 先生

(4) 各授業のねらい

前項までに説明してきたカリキュラムは、手話通訳に必要な能力に基づいて作成されたものである。ノースイースタン大学のカリキュラム MAP は巻末に掲載されているが、これを見るとねらいとしている手話通訳上の能力がどの段階で導入され、どの授業を経て習得されていくのかを把握することができる。

Academic Requirements **I=Introduced,** **R=Reinforced,** **M=Mastered**	AMSL 1101 Elementary ASL 1	DEAF 1500 Deaf People in Society	AMSL 1102 Elementary ASL 2	LING 1500 Intro/Linguistics	AMSL 2101 Intermediate ASL 1	DEAF 2500 Deaf Culture/History	AMSL 2102 Intermediate ASL 2	AMSL 2700 ASL Linguistics	INTP 3500 Intro to Interpreting	INTP 3510 Interpreting Inquiry Texts	ENGL 3301 Advanced Writing in Dis	AMSL 3101 Advanced ASL 1	INTP 3515 Interpreting Narrative Tex	AMSL 3550 Performance Interpreting	AMSL 3102 Advanced ASL 2	INTP 4510 Interpreting Expository Te	INTP 4650 Ethical Decision-Making	INTP 4651 Ethical Fieldwork	INTP 4940 Research Capstone	INTP 4515 Interpreting Persuasive Te	INTP 4996 Interpreting Practicum		Core Courses	Elective Courses
Prerequsites																								
1. **American Sign Language**: Possess proficiency in ASL that at least enables them to converse in a culturally appropriate and participatory fashion, to narrate, and to to describe with connected discourse.	I		R		R		M					M			M									
2. **English**: Possess proficiency in spoken and/or written English that at least enables them to converse in a culturally appropriate and participatory fashion, to narrate, and to to describe with connected discourse.								I	I		R		R	M		M	M	M	M	M	M		M	M

図　ノースイースタン大学のカリキュラム MAP（一部抜粋）

上図はこの一部である。縦軸に習得すべき能力、横軸に各授業科目名が並べられている。また表に書き込まれているアルファベットは、それぞれ I: Introduced（導入）、R: Reinforced（強化）、M: Mastered（習得）を示している。例えば、一番初めに挙げられた ASL に関する技術は、初級 ASL1 で初めて導入され、初級 ASL2～中級 ASL1 にかけて強化されて、最終的に中級 ASL2～上級 ASL2 の間に習得されるようカリキュラムが設計されているのがわかる。その他、リストには一般教養、社会科学・行動科学、専門教育等の項目が並んでおり、さらに専門教育の中には、知識、技能（言語、メッセージの翻訳、主題の理解、調整技術）研究、実習などが挙げられている。

４）シラバスと課題・教育ツール　－質問的談話通訳の授業の場合－

ノースイースタン大学はセメスター制を取っており、1 学期は 14 週間で、1 コマあたり 3 時間で週 2 回の授業構成となっている。以下、質問的談話通訳の授業を例に取り、一つの授業がどのような形で進められていくのかを説明する。

(1) 授業概要

質問的談話通訳のシラバス（授業概要）は以下のように示される。

【Course Description】

Students will study of the processes of translation and interpretation through the presentation of theoretical models of interpretation focusing on inquiry texts (dialogue interpreting). Students will develop cognitive processes necessary for translation, consecutive and simultaneous interpretation. In addition, students will develop strategic decision-making skills to achieve cross-cultural mediation. Students will learn and incorporate techniques of self and peer assessment to facilitate the development of interpreting skills.

【授業概要】

この授業では、質問的談話（会話通訳）における通訳モデルに関する学習を通して、翻訳や通訳のプロセスについて学ぶ。また、翻訳や逐次通訳・同時通訳に必要な認知プロセスを向上させるとともに、異文化間の調整に必要な戦略的意志決定スキルの向上を目指す。加えて、通訳技術の向上に欠かすことのできない自己および他者評価の技術を学習する。

手話通訳というのは、極度な時間的制約の下で多数の意志決定を行う仕事であり、この過程には複雑な認知プロセスが必要とされる。そのため、学生はまずこの一種独特な頭の使い方に慣れることが求められている。また、シラバスの中で自分の持つ手話技術を正しく評価したり、仲間の通訳技術についてコメントできる関係を作っていくことに触れられている点にも注目しておきたい。

次ページの表は質問的談話通訳の授業における 1 学期間の予定である。これを見ると、各回ともディスカッションと通訳実習を織り交ぜて構成していることがわかる。また、文献を読んでレポートにまとめる読み課題や翻訳課題、日々の学習成果を報告するための GTC Log（(3) 参照）など、たくさんの課題が課せられている様子も見て取れ、週に 2 回の授業とはいえかなりハードな状況が伝わってくる。

(2) 読み課題

先述の通りノースイースタン大学では学生のリテラシー向上を目標にしているが、専門科目の授業でも 2 週間に 1 回読み課題を提示し、内容をレポートにまとめさせている。また、文献の内容は学生に順番に発表させるとともに、その後のディスカッションのリーダーを担当させるなど、内容の十分な理解を求めているとのことである。こうした発表やディスカッションは、読み取り通訳に必要なパブリックスピーキングの力を養うことにもつながるため、読み課題時のみでなく頻繁に授業に取り入れている。

(3) GTC Log（Growth-to-Competency Logs；技術向上にむけた記録）＜巻末資料参照＞

これば通訳技術の向上にむけて日々どのような練習を行ったかを記録していくシートで、ガイドと記録用紙の 2 種類から構成される。このうちガイドには、英語や手話・通訳の力を伸ばしていくためにできる取り組みの例がいくつか紹介されている。例えば、英語力の

向上のためには「新しく知った単語をリストアップし、その意味を調べるとともに、自分で例文を考えてノートに記載する」などの方法が提案されている。学生はこうした学習法を参考に自分に必要な課題を見い出し、どのような取り組みを行ったかを記録用紙に記載していく。学生には月に 1～2 回提出を求めているが、重要なのは自分で課題を課し、自分で取り組むことであり、これが通訳者に必要な技術研鑽につながると考えている。

なお学生にはこの GTC Log の他に、学期に一回自分のポートフォーリオ（学習記録）を提出させている。これは 1 学期間の自分の成長を記録するものであるが、日々GTC Log にまじめに取り組んでいれば、どのような学習がどのスキルの獲得につながったかが一目瞭然であり、ポートフォーリオの提出は容易になるはずと伝えている。

表　1 学期間の予定（質問的談話通訳）

週	内容
第 1 週	オリエンテーション／能力判定面接
第 2 週	【実習】ASL および英語の能力 【ディスカッション＆講義】認知プロセス、通訳の操作的定義、翻訳プロセス 【読み課題】ディスコース分析
第 3 週	【ディスカッション＆講義】質問的談話／逐次通訳 【課題】第 1 回翻訳課題提出
第 4 週	【実習】質問的談話／逐次通訳 【課題】GTC Log 提出 【読み課題】ディスコース分析
第 5 週	【実習】質問的談話／逐次通訳 【課題】第 2 回翻訳課題提出
第 6 週	＜祝日のため休講＞ 【ディスカッション＆講義】自分たちの職業的・文化的充実度に関する評価 【読み課題】文化的な充実度の実態
第 7 週	＜中間試験＞ 【課題】観察レポート提出（3 回分）／GTC Log 提出／第 3 回翻訳課題提出
第 8 週	【実習】質問的談話通訳 【読み課題】逐次通訳と同時通訳
第 9 週	【実習】質問的談話通訳 【課題】第 4 回翻訳課題提出
第 10 週	【実習】質問的談話通訳 【課題】GTC Log 提出 ＜休日のため休講＞ 【読み課題】ASL における敬語表現
第 11 週	【実習】質問的談話通訳 【読み課題】社会言語学的モデル
第 12 週	【実習】質問的談話通訳 ＜休日のため休講＞
第 13 週	復習 【課題】GTC Log 提出／観察レポート提出（2 回分） 【読み課題】（内容は後日）
第 14 週	復習＆期末試験 【課題】第 5 回翻訳課題提出

(4) 観察レポート＜巻末資料参照＞

質問的通訳の授業に限らず、通訳実技の科目では実際に学期中に現場の通訳を見に行き、観察レポートを書くことが求められる。学生は事前に手話通訳者に連絡を入れておき、手話通訳者から対象となるろう者や主催者側に連絡をする。加えて当日会場に出向いた際には、観察対象となる手話通訳者やろう者・聴者に挨拶をし、特定の観点に基づいて観察を行うこととなっている。また、観察していて疑問などが生じた場合には、終了後手話通訳者に実際に話を聞いてみることで、手話通訳者のものの見方を学ぶ。

この観察学習のためにもガイドと記録用紙が用意されており、ガイドには 14 項目にわたる観察の視点が列挙されている。また、記録用紙には学生の思考を広げるための質問がいくつか記載されているが、学生にはこれにとらわれず自分で考えたことをどんどん記載するように指導しているとのことである。

このように見てくると、ノースイースタン大学のカリキュラムは、自ら学び成長する学生を育てることを主眼に作られているのだと感じます。この観察学習についても以前は何回が適当かという議論もあったそうですが、Rico Peterson 先生ご自身はそういう議論はナンセンス、学生には「100 回以上必要！」と伝えればいいとおっしゃっているそうです。教員が「3 回やりなさい」といったら学生は 3 回しかやらず、それ以上の努力をしません。だからといって「8 回やりなさい」と数を増やしても、やはり学生は 8 回までしかがんばらないでしょう。だからこそ 100 回なのです。もちろん学生は「そんなにできない」というでしょうが、それで良いのです。大切なのは何回やれば十分という数字なんてないことに気づかせることだからです。

(5)Vimeo（ビデオ共有サービス）

学生のビデオ課題提出に利用しているサービス。教員・学生ともにアカウント登録をしていて、自由にビデオ動画をアップロードできるような形をとっている。右図のようにサービス自体は無料で利用することができるが、ノースイースタン大学では頻繁に学生に動画のアップロードを求めるので、教員・学生ともに有料版のアカウントに登録する形としているとのことである。なお、実際の使用では、授業ごとにグループを作成して該当する学生を登録しておく。すると、学生から課題の提出があったときに教員のページにリストアップされるとのことである。

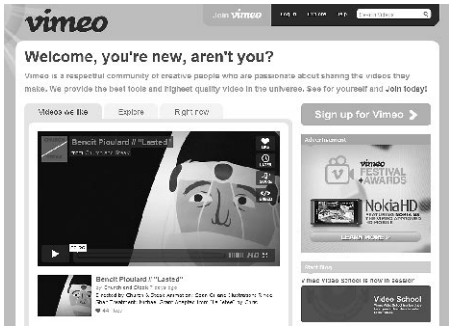


図 Vimeo サイト（http://vimeo.com/）

コミュニティでビデオ共有ができるサイト。有料・無料の会員登録が必要で、それぞれ以下のサービスが利用可能。

	無料版	有料版
保存容量	500M/週	5GB/週
Web 広告	あり	なし
グループ数	1	制限なし
詳細なプライバシー設定	不可	可
料金	無料	$59.95/年 or$9.95/月

また、アップロードするファイルの公開/非公開については、学生自身が選択できる形になっており、グループ全体に公開したり、教員にのみ提示するなどの選択が可能である。学生達は往々にして、最初のうちは非公開にしたがるが、徐々にクラスの他の学生にも見てもらいコメントをもらった方が有効だと気づきはじめる。そのため、最終的にはほとんどの学生が公開設定にするようになるとのことである。

Vimeo の使用例として見せていただいた動画は、ちょうど講義のあった週に締切となった提出課題でした。このうち一つは読み取り通訳課題で、MJ Bienvenu 氏の手話表現を読み取り、音声にて通訳するというものでした。読み取り通訳課題なので、評価は基本的に音声に基づいて行うのですが、課題の提出は常に動画で行わせているとのことです。

これは「読み取り通訳時にろう者からどう見られているのか」を確かめさせるためのもので、通訳時の気になる動きや表情等がないか確認をするためとのことです。「手話通訳者が不安な表情を見せると、ろうの話者は通訳者に合わせて話をするようになる。手話通訳者はその場のコミュニケーションが円滑に行われるよう支援するための存在で、話者の話を邪魔するためにいるわけではないはず」というのがこの根底にある考え方だそうです。

実際、今回提出していた学生の中でも、とても余裕のある表情で読み取り通訳をしている学生がいました。彼女の場合も初回の課題提出時は姿勢が悪く、何度も眼鏡を触るなど、気になるしぐさが多数あったとのことです。しかし、動画の提出とともに自分の読み取り通訳に関する評価を提出させ、その中で気になるしぐさが一体何回出現していたかを数えて明記するよう伝えていったところ、現在のような通訳が可能になったということでした。もちろん自分の癖を一度で修正するのは大変難しいものですが、重要なのは「まず自分で意識付けをし、その数をきちんと数えさせること。これが自己評価というもの。」とのことです。これにより学生は自然とその動作に意識が向くようになり、徐々に改善されていくとおっしゃっていました。

(6) ブラックボード

大学向けに開発されているコース管理システムの一つで、授業ごとにシラバスを公開したり、学生のレポート提出やチャット、掲示板等の機能を用いたディスカッション等に使用される。手話通訳者養成コースの場合も、授業ごとにページが設定されていて、ここに授業概要や各回の予定などが掲示されている。また、学生に提示する課題などもここにアップロードすることができ、学生は各自授業ページにアクセスして課題をダウンロードし、レポートにまとめてオンライン上で提出するなどの流れになっている。また、先述の GTC Log や観察レポートのための記録シート、Rubric 等もここからダウンロードでき、いつでもアクセス可能な形になっている。

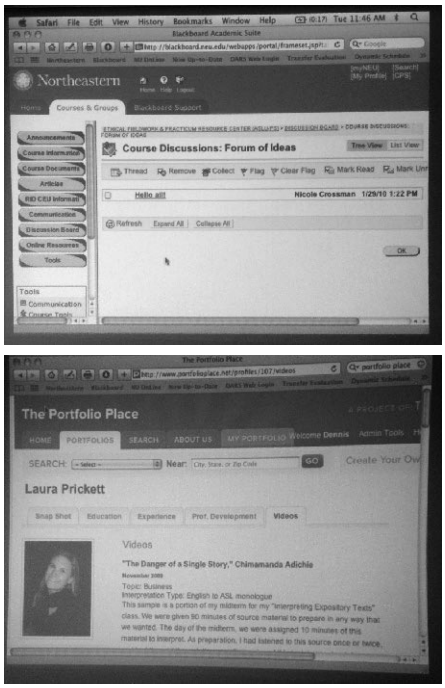


写真　ブラックボード

(7) メンター制度

メンターというのは日本でいうスーパーバイザーに近い存在である。ノースイースタン大学の手話通訳者養成課程では、4 年生の後期（春学期）に実際に手話通訳活動を行っている先輩手話通訳者について現場に出て、実際の手話通訳体験を行っているが、こうした場面でマンツーマン指導を行ってくれる先輩のことをメンターと言う。

もともとボストンは非常に長いメンターの歴史を持つ地域で、メンター制度の HUB（中心地）とも呼ばれている。しかも、ノースイースタン大学の大学院には、メンターとしての指導技術を学ぶためのコース※も設置されており、ボストン地区の手話通訳者の多くがこのコースを受講している。なおかつ、ノースイースタン大学で依頼しているメンターの多くは、同大学の卒業生でもあるため、実習を行う学生達の状況を理解し、質の高い指導を行ってくれるそうである。

実際にメンターを行う時には、前期（秋学期）のはじめに、メンターとなる手話通訳者に対する研修を行い、指導方法や必要な手続き等についての説明を行う。その後、学生が

※ 1 年間のオンラインコースで手話通訳の評価方法等を学ぶ。卒業者には Certificate（認定証）が与えられる。

実習を希望する分野に合わせてメンターを選び、実際の通訳場面に出ていくとのことである。また、メンターには学生の様子やスキルを知らせるため、学生が定期的に更新しているポートフォーリオの一部にもアクセスできるようにしているとのことである。ここには学生が今まで学習してきた過程などが記載されているほか、実技課題のビデオなども提示されている。そのためメンターはこうした情報を元に、学生のレベルに応じた通訳場面を選択し、利用者・主催者ならびにチームで働く手話通訳者等の了解の元、実習の場を提供していくことができるとのことであった。なお、実際にメンタリングを体験すると、その関係は非常に強固なものになり、大学を卒業して実習が終了した後も、よい相談役として現場活動を支えてもらう関係になるとのことである。

特別講義にて質問的談話の講義について説明される Rico Peterson 先生
（12 月 9 日筑波技術大学にて）

５）授業内容の例　―質問的談話

通訳実技の授業をする上で何より大切なのは素材の選択である。授業では学生の実力や学習スタイル・ニーズを考慮に入れ、個々の学生に何を学ばせたいかという視点で題材を選択する。ノースイースタン大学では、例えば下図のようなイラストを用い、学生の自発的発話を元に通訳させることが多いとのことである※。以下、このイラストを用いた通訳練習の方法について実例を交えながら説明する。

A busy railway station

(1)練習方法

４名の学生に以下の担当を割り振り、通訳練習を行う。なお、これは質問的談話を想定した学習である。

学生 A　（聴者役）	：イラストの内容を見て 5 つの質問を考え、学生 B に尋ねる。
学生 B（ろう者役）	：A からの質問に手話で答える。ただし答えが不明な場合でも単に「わからない」とするのではなく、答えを想像して回答する。
学生 C（通訳者役）	：A と B の間の通訳を行う。
学生 D（観察者役）	：会話および通訳の様子を見てコメントをさせる。

※ あらかじめ用意された文章や DVD とは違い、こうした生の発話（Authentic Texts）には、即興的で自然な文から少し堅苦しい文まで幅広い文章形態が混在する。これがかえって実際の現場に近い実践的な練習につながるとのことである。なお、こうしたイラストは英語教育の教材として多数販売されており、「ELS」「Picture Story」「Language Elicitation」などのキーワードで検索できるとのことである。

例）A：真ん中で走っている彼は、なぜ走っているのでしょう？
B：大事な会議があるにもかかわらず遅刻しそうなので、あわててこの電車に飛び乗ろうと走っているところなのだと思います。
A：レストランの前で楽しそうに話している３人はどんな内容を話しているのだと思いますか？
B：単に油を売っているだけだと思う。仕事を忘れて無駄話をしてるんじゃないでしょうか。
A：男の子が泣いている理由は何でしょう？
B：お母さんに「待っててね」と言われて待っているのに、なかなか帰ってこないから不安になって泣いているのだと思います。

この際、学生は単語レベルの質問や回答をしがちなので、きちんとした文章を用いるように伝える。特に、答えの文章は極端に短くなりがちなので、その場合には一度質問を繰り返して答えるよう指導するとよいとのことである（「男の子が泣いているのはどうしてですか？」「悲しいから」→「男の子が泣いているのは悲しいからです」など）。また評価の際には、手話通訳の様子だけでなく、教室全体に聞こえる音声で話をしているか、発音は明瞭で聞き取りやすいか、文法や構文は適切に用いられているかなど、話者の音声面などにも着目して評価することが重要である。

同様に、他の談話形態における通訳練習を行う場合であっても、同じイラストを用い以下のように教示をアレンジすることで、幅広い学習ができる。またノースイースタン大学の場合、いきなり通訳をさせるのではなく、まずは英語での会話、次に手話での会話をさせ、その上で逐次通訳、同時通訳と進むなどのステップを踏んでいるとのことである。これは、そもそも英語ができなければ通訳などできないという考え方に基づくもので、両言語のスキルを十分引き上げてから通訳という作業を行うよう留意していることが分かる。さらに、講義の中では触れられていなかったが、通訳担当をする学生の技術によって、文章の長さを変えたり、だんだん内容を複雑にしていくなどの調整も可能だと考えられる。いずれにしても、対象やレベルが固定される素材ではなく、学生の状況に応じてさまざまに応用可能な素材を用いている点で非常に興味深い。

例）物語的談話：この絵を見て、５つの文章で物語を作りなさい。
説明的談話：７つの文章を使って、この絵を説明しなさい。
説得的談話：この絵を用いて何かを説得しなさい。
（例）「右下に描かれている男の子は、迷子で泣いているのではなく、実はカバンの中に大量の現金が入っていて、ちょうど警察官が近づいてきたので、これでは牢屋に入れられる！と思って泣いている。中央で走っている男の人はこの子の父親で、銀行強盗をした張本人だが、警察が来るのを見てあわてて逃げようとしているのだ！」ということを説得してください等）

(2)評価方法

前項の要領で会話が終了したら、次は観察役の学生にコメントを求める。この際留意すべき点が二つある。まず一つ目は、学生同士あるいは学生と教員が互いに認め合い、尊重

しながら適切な評価を伝えられる関係を築いていくことである。学生はどうしても互いの技術にコメントすることに消極的になりがちである。また、批判的なコメントで傷ついてしまう学生もいるかもしれない。そのため、特にはじめの段階では学生の感情に気を配り、気持ちよくコメントを言い合える環境を作っていくことが大切である。そして二点目は、手話通訳技術について共通に語るための言語および評価基準あるいは尺度を構築していくことである。はじめのうち、学生の多くは手話通訳を評価するための視点を持っておらず、何をどうコメントして良いのかわからないことが多い。そのため、コメントも曖昧になりがちで、感覚的な言葉しか出てこないことも多い。教員はそうした学生の表現を客観的かつ厳密な表現に置き換え、クラス全体が正しく手話通訳を評価できるよう育てていくことが重要とのことである。以下、Rico Peterson 先生による講義実演である。

教員：では、今見た会話の様子について評価をして下さい。まず、日本語による質問の様子はいかがでしたか？正しい文法が用いられていましたか？質問に対する答えはどうでしょう？こちらも正しい文法が用いられていましたか？双方の間の手話通訳はどうでしたか？きちんと正確に行われていましたか？音声ははっきりと聞き取ることができたでしょうか？ろう者に理解できる手話を用いていましたか？思いつくところを話して下さい。

評価の際に着目すべき点を説明している。

学生：会話も通じていたし、とてもいい通訳だったと思います。少しとまどう様子が見られたので、もう少し淡々と通訳できれば良かったかもしれません。でも、その感じがかえって場を和ませていたので、全体的にはいい通訳だったと思います。

教員：「とてもいい」というのは、どういう基準で良いと思うのか教えてえてくれますか？例えば、「とてもいい」というのは、それが最上ということでしょうか？それとも「とてもいい」より上にもっと良い状態があるのでしょうか？逆に悪い方はどうですか？どこから始まって「とてもいい」はどのあたりの位置にあるのですか？

学生の漠然とした回答をより客観的できめ細かな評価に変えていこうとしている。

学生：話が通じていたので、まずは OK だと思いました。

教員：なるほど「メッセージの等価性（Message Equivalence）」が一つの基準だったということですね。他にはどうですか？

学生：通訳者の持っている雰囲気とか態度が場に合っていたかという点もよかったと思います。

教員：「場の調整技術（Strategic Management）」も基準になっていたということですね。

手話通訳技術の評価を語る上で必要な言葉を与えている。

学生：手話表現でちょっと気になったところがあったのですが、「（日本語）この人は何をしていると思いますか？」という質問に対して「（手話）何の仕事をしていますか？」と聞いたところがあったので、そこは少し違うかなと思いました。

教員：なるほど。すると「メッセージの等価性」「場の調整技術」に加えて「語彙選択（Language Choice）」も基準だったことがわかりますね。ということは、これら 3 つの基準に基づいてあなたは「とてもいい」と判断したということですね。じゃあ、少し考えてみてください。あなたの頭の中には何かしらの尺度があると思います。その尺度の中でこの「とてもいい」というのはどの位置にあたるのでしょう？「とてもひどい」から「すばらしい」までの尺度があるとすれば、あなたが言う「とてもいい」はどこに位置しているか想像できますか？

実際にはさらに細かくやりとりをするそうだが、今回は時間がなかったので省略。

大切なのは学生自身が評価尺度上のどの位置をもって「とてもいい」と言っていたのかに気づくこととのこと。

学生：（うなずく）

教員：すばらしい！それが手話通訳者としてのモノの見方です。今、あなたは手話通訳というものを段階的に見ることができるようになったと思います。ひどい通訳もあればすばらしい通訳もあります。でも、多くの通訳はその中間のどこかの位置にあるわけです。1 時間前まで、あなたは手話通訳について何も知らなかった。それなのに、あっという間に手話通訳者としてのモノの見方を獲得した。手話通訳を多角的に評価し、評定する視点を身につけた。すばらしい能力です。Very Good! あなたのような学生と一緒に学ぶことができてとてもうれしいです。どうもありがとう！

学生ができるようになったことはきちんと評価し、言葉にして伝えている。

「手話通訳の技術を伸ばそうと思ったら、手話通訳者自身が手話通訳という技術についてきちんと語れる視点と能力を持たねばならない」これは長年手話通訳という仕事と向き合い、手話通訳というものを科学的に研究してきた先生方だからこそ出てくる想いであり、ノースイースタン大学のカリキュラムの神髄にある思想なのだろうと感じました。

手話通訳者というのは一生自分の力で自分を伸ばしていかなければならない存在である。だからこそ誰かに技術を教えられるのではなく、自分で自分の技術を伸ばしていかなければならない。そのためには自分の技術を客観的に評価し、何がどのぐらいできているのかを正確に表現できなければならないし、互いにそれができる関係を築いていかなければならない。そんな想いがあるのでしょう。また、そんな技術を身につけた学生を多数手話通訳界に輩出していくことで、とかく感情的になりがちな手話通訳者コミュニティ全体をも変えていきたいとの想いが感じ取れます。

現に学生の曖昧な表現を一つひとつ正確な言葉に置き換えていく Rico Peterson 先生の指導は、思わず拍手が出てしまうほど感動的な授業でした。手話通訳者の養成には研究者の介在が必要！そう強く感じさせられた瞬間でした。

もうひとつ、Rico Peterson 先生の指導を見ていて感じたのは、学生を励まし勇気づけるのがとびきり上手だということです。教員はややもすると学生に厳しくあたりすぎたり、過度に甘くなったりするものです。けれども先生の言葉の中には、通訳という仕事の厳しさと手話通訳者であることの喜びが同時に伝えられていて、これが学生達の成長の鍵になっているのだろうなと感じさせられました。

講義の中でも先生が発言をしてくれた学生にすばらしいお言葉をかけている場面がありましたが、この他にも、来日期間中には学生や指導者に対して以下のような言葉をかけられていました。

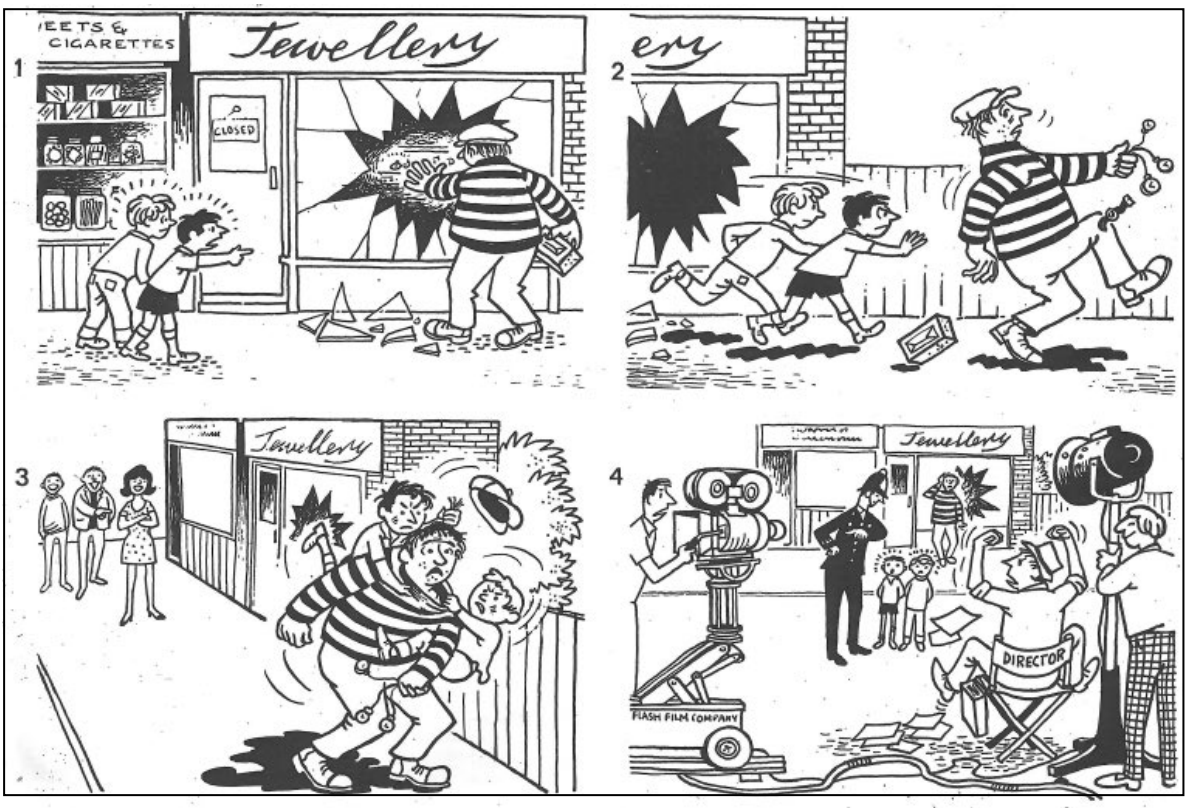
「（手話通訳技術に対して伸び悩んでいる学生に対して）手話通訳というのは一生学び続ける仕事。だからできたかどうかではなく、客観的指標のどの位置にいるかを考えなさい。そうすれば数年前より確実に成長してる側面がわかるはず。焦らなくてもいい。どうせ一生学習が続くんだから。」

「（まだ不十分な状況だけど、手話通訳者の養成を始めていいかどうか迷っている方に対して）大丈夫、心配しなくてもいい。周囲からの批判は絶対に来る（笑）！間違いない。絶対に周りから批判は受ける（笑）！でも、5 年、10 年と経てば、みんなあの立派な養成プログラムは、ここから始まったんだとわかるときがくる。正直言って、たった数週間で手話通訳者を養成しようなんて無茶苦茶な話だと思う（笑）でも、NTID で行われたアメリカ初の手話通訳養成プログラムだって、たった 10 週間の研修から始まったんだ。あなたが始めなければ何も変わらない。ぜひやってみればいいじゃないか。」

６）授業内容の例　―物語的談話

次に物語的談話に焦点を当てた通訳実技指導の例について紹介したい。ここでも先ほどと同様にイラストを元に自発的会話を引き出し、これを起点談話として通訳練習を行っている。用いるイラストは下の通りである。

Catching a thief



(1) 練習方法

４人１組になりそれぞれのメンバーに各イラストを割り当てる。各自与えられた絵について一つの文章を作り、これらをあわせて４文からなる物語を作る。

> 例）男の子達２人が道を歩いていたら、目の前でショーウィンドウのガラスを割って中の商品を盗もうとしている男の人を発見しました。「泥棒だ!」と思い子ども達は男の人を追いかけていきました。大きな男の人ですから、２人の子どもは飛びついて取り押さえました。でも、それはなんと映画の撮影のためだったのです。２人の男の子達は、おまわりさんや映画監督に叱られてしまいました。

グループの中の１人を指名し、作成した物語を日本語で発表する。手話通訳者は他グループから１人学生を指名して担当してもらい、発表者の日本語、通訳者の手話の両方を評価する。

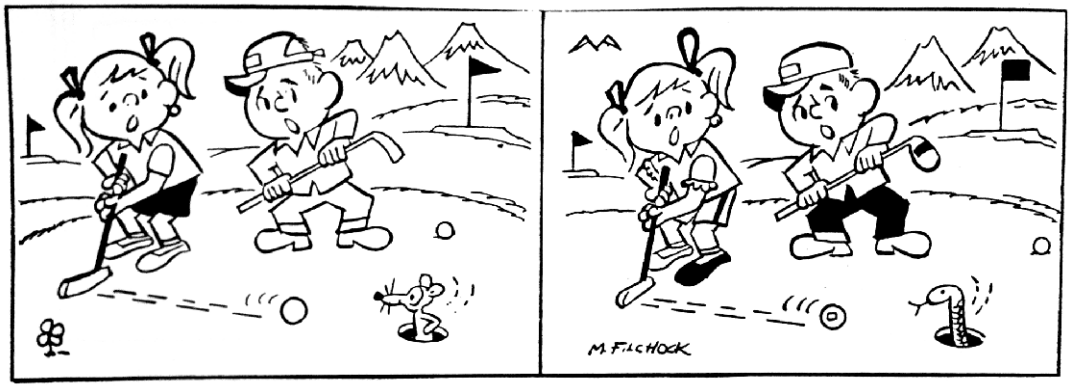
(2) 評価方法

評価の際には、まず日本語の物語の発表がどうであったかを考える。原稿を見ながら下を向いて発表していなかったか、スライドをちらちら見て自信なさげな様子がなかったか、音声は明瞭で教室全体に届く声であったかなど互いに問題点を指摘し、まずは母語である日本語で堂々と話ができる態度を育てていく。この際、教員はできるだけ良い例、悪い例を自分でやって見せ、目で見て学べることを心がけると良い。

また、手話通訳の評価で重要なポイントは、きちんと原文に基づいた通訳ができていたかという点である。グループが複数あると、文章表現はそれぞれ少しずつ異なるものである。そこに先入観が入ると、つい自分の作った物語にあわせて通訳をしてしまう。しかし、話者の話していない内容まで勝手に通訳してしまうことはできないため、自分の事前に持っている知識を生かしつつ、話者の話と等価な情報が伝えられるよう指摘していく必要がある。

７）授業内容の例　―説明的談話

最後に紹介があったのは、説明的談話の指導例である。説明的談話では、例えば料理のレシピを説明してもらったり、大学からロチェスターまでの道順について説明するなど身近にある素材を用いた練習方法も可能とのことである。また、インターネットで会社の応募フォームを探させ、その項目に基づいて自分のことを説明させるなどの課題を課すこともあるとの話であった。教材の実例としては、やはりイラストを素材に用いた指導方法の紹介があった。以下、間違い探しのイラストを元にした通訳練習について紹介する。



(1) 練習方法

何人かのグループで話し合い、左右のイラストのうち同じ部分と異なっている部分をそれぞれ見つけてリストを作成する。その後、グループの中の 1 人を指名し、作成したリストの内容を手話で説明してもらう。この際、ただリストの内容を列挙するだけでは内容が十分伝わらないので、きちんと文章構成を工夫し情報を整理して伝えるよう努力させる。また、もう 1 人の学生には読み取り通訳をしてもらい、この音声に焦点をあてて評価する。なお、他の指導例と同様にこの素材の場合も、通訳練習に入る前にまずは英語のみで練習

させたり、手話のみで練習させるなどの段階を踏むことも可能である。

例）まず、絵の中には男の子と女の子が書かれていますが、このうち女の子についての共通点は、髪型、表情、姿勢…などがあります。男の子については…

(2) 評価方法

読み取り通訳の評価時には、学生が表した手話に文法的誤りがあろうと、曖昧な表現があろうと、それ自体を問題にするのではなく通訳の評価に焦点をあてることを徹底させる。たとえ話者の手話が読み取りづらかったとしても、現場ではそれは何の言い訳にもならないし、手話通訳者は話者の手話力についてどうこう言うような立場にはないからである。アメリカでもASLを使用しないろう者に対して、手話通訳者が「ASLじゃないから読み取れなかった」等の不満を口にすることがあるが、それは手話通訳者として許される態度ではない。手話通訳者の処理能力には限界がある。その限られた能力を話者への不満に割くくらいなら、その分のエネルギーを今行っている手話通訳のために充てるべきというのがノースイースタン大学での教えである。

８）授業内容の例　―模擬通訳

手話通訳実技の授業では、実際の現場で生じる諸問題に対してどう対応するかといった各種調整技術の学習のため、模擬通訳を取り入れることもある。この際ノースイースタン大学では、演劇を学んでいる学生達と地域のろう者を教室に招き入れ、現場さながらの状況の中で模擬通訳を行うそうである。具体的には即興劇の手法を用い、聴者側とろう者側にそれぞれ一部の情報を与えるとともに、大まかな場面だけを設定して自由に演じてもらう。学生はこれら聴者・ろう者の間に入って手話通訳を行うといった方法を取っているそうである。

例えば、大家さんとアパートの契約交渉をするといった場面の場合、聴者には「あなたはアパートの大家をしています。これからろうの入居予定者がやってきて、アパートの契約をする予定です。」などの情報を与える。一方、ろう者には「これからアパートの大家さんと契約交渉に行く。けれどもあなたは室外犬を飼っていて、このアパートにはペット禁止のルールがある。」との情報を伝える。そこに細かな情報を知らない学生を手話通訳者として配置し、模擬通訳を行う等の方法をとっているそうである。

また、その場における権力構造の取り扱いを学習するような場合には、医師と患者の間の通訳で「医師は新米の研修医で、実はこれが生まれて初めての診療である」などの情報を伝えたり、逆に患者には「あなたはこの病院の設立者の娘である」等の内容を伝え、模擬通訳をすることもある。その他、「診療の途中で女性が間違ってコーヒーをこぼしてしまう」「医師はこの患者に余命2週間しかないことを宣告する」など、さまざまなゆさぶりをかけることで、複雑な人間関係をどう処理していくかの練習になるとのことである。

さらに、ノースイースタン大学では医者や看護師・心理カウンセラーを目指す学生とと

もに授業を行い、彼らの研修としてのロールプレイに手話通訳者として参加し、模擬通訳を行うこともあるとのことである。つまり、医者役を医師を目指す学生が担当し、患者役のろう者に対して診療を行うとともに、この間の手話通訳を手話通訳養成課程の学生が担う。こうすることで実際の診療場面に近い形での模擬通訳ができるほか、医学生達にも非常によい影響を与えることができると話されていた。

９）授業内容の例　―エクササイズ

ノースイースタン大学では、通訳実習の授業の開始時には必ず簡単なエクササイズを実施しているそうである。手話通訳というのはすぐに頭の切り換えが必要な仕事である。これらのエクササイズは、外の世界から教室に入ってきた際にすぐに頭を切り換え、集中して授業に取り組めるよう仕向けるねらいがある。以下は、今回の講義の中で紹介されたエクササイズの例である。

(1)「１手型（人差し指を伸ばす手型)」を使ってできるだけ多くの手話を考える（「思う」「何？」「考える」「不思議」「見る」など)。5 分ほど時間を与え、グループでできる限り多くの手話を考えさせる。ろう学校でもよく用いられるエクササイズで、手話に関わっている人なら誰でも簡単に参加できるのでアイスブレイクとして用いることができる。

(2)0 から 9 の数字を使い、順番に思いつく数字をあげていく。その際、2 人目以降の人はそれまでのメンバーが挙げた数字を示してから自分の数字を加えて復唱し (1→1・3→1・3・6→1・3・6・2 など)、できるだけ長く続くよう努力する。

写真　特別講義でのエクササイズの様子

このエクササイズに慣れてきたら、自分が間違えると自分の前の人がアウトになるというルールを加える。これは人から情報を受け取り、伝えていくという作業の責任の重さを自覚させるとともに、自分のミスが他人の評価に影響するという通訳作業の本質を体験させるため。さらに、互いにアイコンタクトを取って、コミュニケーションを図りながら進めることの重要性を教える。

(3)各グループとも休憩時間に何をやったかを発表させる。この際、グループメンバーである 4 人のうち 1 人は発表を担当し、もう 1 人はそれを手話で通訳する。残りの 2 人はこの様子を見てメモをとり、あとでコメントしてもらう。このうち 1 人は発表者の話し方について、もう 1 人は手話通訳についてコメントするよう求める。

手話通訳には事前の準備が重要だが、通常の通訳場面

では、ほとんど準備する時間も与えられずいきなり担当せざるを得ないことも多い。そのため、このように授業中に突然通訳をさせることで、学生には実際の環境に近い状態で通訳体験をさせることができ、教員としても事前に準備をしていない状態でどの程度学生が通訳できるのかといった生の実態を知ることができる。また通訳技術の向上のためには、互いの通訳結果について気兼ねなくコメントができる関係を作っていくことがきわめて重要である。そのためノースイースタン大学ではカリキュラムのごく早い段階から、できるだけ多くお互いに指摘し合う機会を設け、批判を受け入れる態度や互いの長所・短所について正しく指摘できる力を養っている。

３．手話および手話通訳の評価指標

1）手話通訳の評価指標

手話通訳技術の適切な評価を重んじるノースイースタン大学では、手話通訳の評価指標についても数多くの科学的見地に基づき作成してきている。授業の中では、目標とする技術に応じてさまざまな評価項目が用いられているが、最も包括的な指標が表にしめすRubric とのことである。

表　ノースイースタン大学で使用されている Rubric

通訳技術に関わる評価項目		
Target Language Equivalence Domains 目標言語の選択	Language Match 言語の使い分け	対象者の言語使用状況に応じて、目標言語（手話・音声言語）を柔軟に選択し使い分ける力
	Style and/or Register スタイル・レジスタ	個々の現場に応じて、適切な言語的･文化的マーカーを選択し使用していく力　（友人同士の会話やインフォーマルな話し合い、各種情報提供、フォーマルな講話、式典等）
Meaning Equivalence Domains 意味の等価性	Content 意味内容	起点談話において話されている情報の意味や価値を正確に同定し、目標言語に反映させていく力
	Intent 意図	起点言語において話されている内容の語用論的な機能や目的を正確に同定し、目標言語に反映させていく力
	Discourse Level Processing 談話（ディスコース）レベルの処理	語レベルを超えた意味のつながりや論理構造を正確に同定し、目標言語に反映させていく力
Strategic Management Domains 各種調整技術	Source Text Information Management 起点談話における情報の処理	起点談話の受容や構造的理解に影響する要因を特定し、調整する力（速さ、音量、繰り返し、複雑さ、文脈、内容に関する知識等）
	Interpretation Process Management 通訳プロセスの調整	通訳中に生じるさまざまなサブプロセスを調整する力（理解、分析、記憶、再構築、生成、フィードバック等）
	Situation Management 場の調整	通訳中に生じるさまざまな相互作用を適切にコントロールし、よりよい状態へと持って行く力
	Ergonomic Management 身体的負荷の調整	手話通訳者にかかる身体的、精神的、物理的負荷をコントロールし、最適な環境に身をおけるよう調整する力

言語に関わる評価項目		
Articulation 音韻の正確性	Articulation 音韻の正確性	手型や位置・動き・手のひらの向きといった手話の音韻の構成要素を適切に※用いる力
Grammatical Structure 文法構造	Statements 平叙文の産出	手話として適切な語順や構造を用い、手話文を産出する力
	Questions 疑問表現	手話として適切な語順や構造を用い、疑問表現を表出する力
	Agreement 一致表現	空間の代名詞化や複数表現、位置関係といった一致表現を適切に表出する力
	Temporal Structures 時制構造	必要な語彙および動詞変化等を用いて、時制を適切に表現する力
	Classifier Structures 類辞表現(CL)	類辞表現（CL）を用い手話文を表出する力
	Argument Structures 項構造	伝達すべき命題に応じ適切な手話文を構成する力
Non-manual Behaviors	Non-manual behaviors 非手指動作	文法や意味･感情を示す非手指動作を用い、手話文を表出する力
Fingerspelling 指文字	Fingerspelling 指文字	状況に応じ適切な頻度で指文字を利用する力

※ここで言う「適切」とは、必ずしも辞書形を指すものではなく「地域のろうコミュニティにおいて受け入れられている表現」のことを指す。

(Dennis Cokely & Rico Peterson 作成　和訳は編者)

アメリカの手話通訳者養成プログラムではこうした評価指標が多数開発されているとのことであるが、NIC の実技試験の評価指標を含め、多くの指標が言語の力と通訳技術をきちんと整理しないまま評価してしまっているとのことである。これに対してノースイースタン大学では、言語力の問題と通訳技術の問題はまったく別との考えから、両者を完全に切り分けて評価する方法にしているとの話であった。

なお、学生に対してはこうした評価表の簡易版等を渡し、各々自己評価をさせることもあるそうだが、重要なのは誰かが作った評価項目に基づき評価することではなく、自分自身で自分のための評価尺度を作れるようになることだと教えているそうである。そのため、授業内では今の自分自身の通訳技術を客観的に振り返り、特に弱い部分について自分の評価尺度を作成し、それに基づき評価するなどの練習を繰り返すそうである。これも「大切なのは卒業後自分の力でのびていける学生を育てること！」と繰り返し語られるノースイースタン大学の想いが強く反映された指導と言えるだろう。

２）手話力の評価指標

手話力の評価についてはアメリカでもさまざまな評価指標が作成されているが、現在のところ手話の言語的側面を網羅的に反映した評価尺度というのは開発されていないのが現

状とのことである。一方、英語やスペイン語、フランス語といった外国語の評価については、従来よりアメリカ外国語教育評議会（The American Council on the Teaching of Foreign Languages ； ACTFL）が中心になって標準的な指標を開発し、これを用いたテスト等も実施されてきているとのことである。そのため、こうしたさまざまな言語評価指標の一つとして、ASL の評価を組み入れることはできないかとの検討がなされているとのことで、現在標準的な尺度の作成に向けて共同研究が進められているとの話であった※。Rico Peterson 先生もこの研究メンバーの一員とのことで、今後こうした尺度が標準化され、全米で用いられていくことを期待しているとのことであった。

The American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL)サイト（http://www.actfl.org）

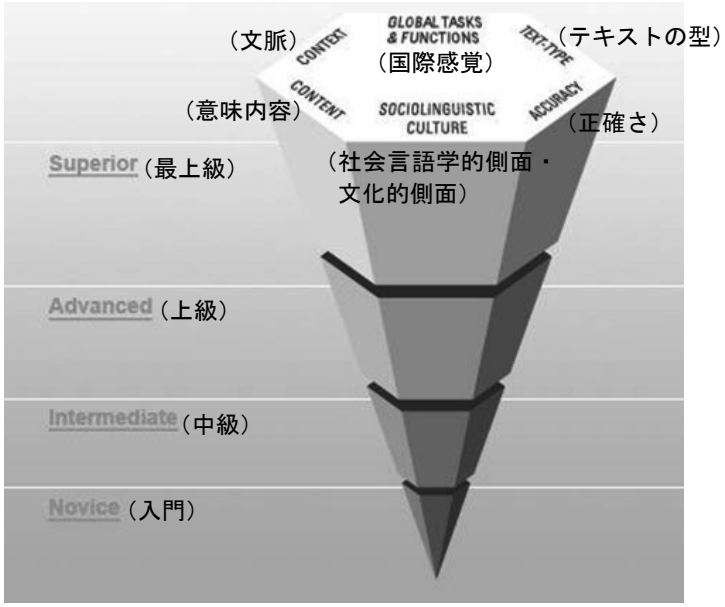


図　OPI における言語スキルのとらえ方

なお、尺度に基づいた言語スキルの評価は、1 対 1 面接による OPI（Oral Proficiency Interview）方式の利用を想定しているとのことである。OPI というのは、ACTFL によって標準化された言語スキルの評定方法で、20～30 分の面接により入門（Novice）から最上級（Superior）までのいくつかの段階に判定する。この際、まずは簡単な質問から徐々にレベルを上げていき、対象者が評価尺度のどの程度の位置にいるかを判定するそうである。その上で、レベルに応じたロールプレイ等を行い、より詳細な言語スキルを判定する。現在、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、日本語、韓国語など、さまざまな言語における指標が開発されているとのことで、今後このリストの中に ASL が入り活用されていくことに期待したい。

※ これまでに開発された指標は、以下の文献に掲載されているとのこと。
ACTFL (1999) ACTFL Proficiency Guidelines – Speaking.

４．おわりに

「良い手話通訳を育てるためにはどうしたらいいのだろう？」「何をどんな順番で教えれば良い通訳者が育つのだろう？」そんな答えを求めて、今回 Rico Peterson 先生来日特別講義を開催した。

しかし、そこで教わったことは、「上記の質問に対する答えは『ない』」ということであった。「手話通訳者養成に王道なし！」これが、先生が長年かけてたどり着いた答えなのだと思う。良い手話通訳者を育てるためには、結局ろう者と生活を共にし、十分な言語スキルと文化的感覚を身につけなければならないし、通訳技術を磨くためにたゆまぬ研鑽を続けなければならない。そして、こうした感覚はデフコミュニティの中で育つものであり、教室の中だけで学び取ることはできないということなのだろう。

でも、この答えがはっきりとわかっているからこそ、ノースイースタン大学からは毎年すばらしい手話通訳者の卵が生まれ、世界有数の手話通訳者養成機関として実績を上げているのだと思う。そしてそこには、「コミュニティへの回帰」と「自ら学び育つ学生の育成」という決して揺らぐことのない二つの理念が脈々と流れているように感じた。さらにその奥には数え切れないほどの研究成果の蓄積があり、手話通訳という仕事を長年客観的に見続けてきた研究者の目があるのだと感じさせられた。「研究者がカリキュラムを作るとこうなる！」そんな想いを体現しているのが、ノースイースタン大学の手話通訳養成課程と言えるのだろう。

では、ろう者がカリキュラムを作ったら一体どんな形になるのだろうか？あるいは「日本人の日本人による日本人のためのカリキュラム」は一体どのような形なのだろう？Rico Peterson 先生曰く、「カリキュラムというものは、地域それぞれの特性を生かして作るもの」今後、この答えを見つけていくのが我々の仕事であり、先生からいただいた宿題なのだと思う。

今回の来日を通して、Rico Peterson 先生からは本当にたくさんのことを学ばせていただいた。末尾ながら先生のご多幸と今後ますますのご活躍を祈念して結びの言葉としたい。

【Rico Peterson 先生名言集②】

手話通訳養成に携わる人間として、常に現場に立っていたいという思いから Rico Peterson 先生は今でも積極的に通訳活動をされているそうです。現在の担当は、かの有名な H 大学博士課程での通訳だそうで、自分の専門外のゼミにおける手話通訳を担当されているとのこと。しかもつい最近までビデオリレー通訳まで担当されていたとのことで、つくづくその姿勢に感服させられます。ビデオリレー通訳は、最近アメリカの手話通訳界に押し寄せてきた大きな変化の波の一つです。そのあり方には賛否両論たくさんの意見が寄せられているようですが、先生曰く「新しい分野だからこそ、自分が体験しておかないと学生達に指導できない！」とのこと。指導者として、手話通訳者として本当に自ら研鑽を積み続けておられる姿勢に心から感動しました。

以下、そんな先生からいただいた言葉の数々です。

「学生にはできるだけ早い段階から、自分の学習に責任を持たせ、教員に頼らなくとも自ら成長していける通訳者を育てなければいけない。通訳人生のうち大学にいる期間はほんのわずか。大学はその後の人生においてどうやって自分の技術を伸ばしていくかを学ぶ場所でなければならない！」

「教員がゴールを設定すると、学生はそこまでしかやらないし、そこまでしか伸びてこない。大事なのは何をどう教えるかではなく、どう学ばせるか。」

「こういう仕事をしていると、『手話通訳者はどうしてそんなに努力をするのか』と問われることがある。確かに手話通訳というのはとてもすばらしい仕事だけれども、決して高収入が期待できるわけでもないし、地位や名誉が手にはいるわけでもない。だけれども、私たちには成功していくろう者の姿が見える。いいサポート、いい通訳を受けて活躍するろう者の姿が。だからこそ手話通訳者は精一杯技術を伸ばし、最大限の手話通訳を提供したいと努力するのだと思う。彼らの輝かしい成功とプロフェッショナルとしての歩みを支えるために。」

最終日の京都観光。清水寺～三十三間堂へ（12 月 12 日京都にて）

巻末資料

- ノースイースタン大学カリキュラム MAP　対訳付 ・・・46
- GTC Log ガイドライン　原文・日本語訳・・・・・・・52
- GTC Log 記録用フォーム　対訳付・・・・・・・・・・57
- 通訳観察レポート　ガイドライン　原文・日本語訳・・・58
- 通訳観察レポート　提出用フォーム　対訳付・・・・・・65

翻訳者　高木真知子・瀧澤亜紀

※　翻訳者注　※

今回和訳した資料のうち、特に箇条書きや表の各項目などについて、本当に責任ある翻訳を手掛けるには、ノースイースタン大学の通訳養成プログラムの全体をきちんと把握する必要がある。しかしながら、今回は、筑波技術大学で行われた２日間の特別講義から得た限られた情報を頼りに翻訳をおこなったため、必ずしも原文の意図を忠実にとらえていない部分があるかも知れないことをあらかじめご了承いただきたい。

対訳　ノースイースタン大学カリキュラムMAP

The ASL Interpreting Program at Northeastern University.

Academic Requirements
（履修科目）

I=Introduced（入門），
R=Reinforced（強化），
M=Mastered（習熟）

	AMSL 1101 Elementary ASL 1 初級アメリカ手話 1	DEAF 1500 Deaf People in Society 社会におけるろう者	AMSL 1102 Elementary ASL 2 初級アメリカ手話 2	LING 1500 Intro/Linguistics 言語学入門	AMSL 2101 Intermediate ASL 1 中級アメリカ手話 1	DEAF 2500 Deaf Culture/History ろう文化／歴史	AMSL 2102 Intermediate ASL 2 中級アメリカ手話 2	AMSL 2700 ASL Linguistics アメリカ手話言語学	INTP 3500 Intro to Interpreting 通訳入門	INTP 3510 Interpreting Inquiry Texts 質問的談話の通訳	ENGL 3301 Advanced Writing in Discipline 専攻別上級ライティング	AMSL 3101 Advanced ASL 1 上級アメリカ手話 1	INTP 3515 Interpreting Narrative Texts 物語的談話の通訳	AMSL 3550 Performance Interpreting 舞台芸術の通訳	AMSL 3102 Advanced ASL 2 上級アメリカ手話 2	INTP 4510 Interpreting Expository Texts 説明的談話の通訳	INTP 4650 Ethical Decision-Making 職業倫理に則った意志決定	INTP 4651 Ethical Fieldwork 職業倫理に関するフィールドワーク	INTP 4940 Research Capstone 卒業研究	INTP 4515 Interpreting Persuasive Texts 説得的談話の通訳	INTP 4996 Interpreting Practicum 通訳実習		Core Courses 必修科目	Elective Courses 選択科目
Prerequsites（本コース履修のための必要条件）																							
1. **American Sign Language（アメリカ手話）**: Possess proficiency in ASL that at least enables them to converse in a culturally appropriate and participatory fashion, to narrate, and to describe with connected discourse. 少なくとも、文化的に適切な形で会話に参加し、一貫性のある談話として、説明・描写などができる程度のアメリカ手話の言語力を有する	I		R		R		M					M			M								
2. **English（英語）**: Possess proficiency in spoken and/or written English that at least enables them to converse in a culturally appropriate and participatory fashion, to narrate, and to describe with connected discourse. 少なくとも、文化的に適切な形で会話に参加し、一貫性のある談話として、説明・描写などができる程度の英語力を有する								I	I		R		R	M		M	M	M	M	M	M		M	M
Content Requirements（必修科目）																							
Liberal Arts（一般教養）	**Students show mastery of these skills throughout their academic career at Northeastern.** **（学生は、ノースイースタン大学在籍中、これらの分野において、常に高い習熟度を示さなければならない。）**																						
a. Superior Oral and Written Communication Skills 上級音声および書記コミュニケーション能力																						M	M
b. Logical thinking, critical analysis, problem solving and creativity. 論理的思考、批判的分析、問題解決と創造性																						M	M
c. Knowledge and appreciation of multicultural features of society. 社会における他文化に関する知識と理解																						M	M
d. Ability to make judgments in the context of historical, social, economic, scientific, and political information. 歴史的、社会的、経済的、科学的、政治的情報を基に判断する能力																						M	M
e. An appreciation of the ethnic, cultural, economic, religioous, social, and physical diversity of the population along with the practical knowledge of its influence and impact on the profession. 民族的、文化的、経済的、宗教的、社会的、身体的多様性を理解し、通訳業務に対するその影響と効果について実践的な知識を有すること																						M	M

Social and Behavioral Sciences（社会行動科学）	**Students show mastery of these skills throughout their academic career at Northeastern.** **（学生は、ノースイースタン大学に在籍中、これらの分野において常に高い習熟度を示さなければならない。）**																							
a. Human behavior in the context of sociocultural systems to include beliefs, ethics, and values. 信仰や道徳、価値観を含む社会文化的システムにおける人間の行動																							M	M
b. Minority group dynamics, prejudice, class, power, oppression, and social change. 少数グループの力学、偏見、階級、力関係、抑圧、社会改革																							M	M
c. Language and society, bilingualism, language variation, syntax and semantics, cross-cultural communication, cross-cultural conflict. 言語と社会、バイリンガル教育、言語のバリエーション、統語論、意味論、異文化コミュニケーション、異文化による衝突																							M	M
Professional Education（専門的教育）	**Students show mastery of these skills throughout their academic career at Northeastern.** **（学生は、ノースイースタン大学に在籍中、これらの分野において、常に高い習熟度を示さなければならない。）**																							
a. Knowledge（知識）:																								
1. Theories of interpretation and translation; 通訳・翻訳理論									I	R			R	R		R			R	R			M	M
2. Historical foundations of the profession; 通訳という職業の歴史的な成り立ち									I								R				R		M	M
3. Interpreter role and responsibilities; 通訳者の役割と責任									I	R			R	R		R	R	R		R	R		M	M
4. Professional ethics; 職業倫理									I								R	R			R		M	M
5. Human relations; 人間関係		I																					M	M
6. Dynamics of cross-cultural interaction; 異文化コミュニケーションの相互関係・相互作用		I				R		R		R			R	R		R	R	R		R	R		M	M
7. Intercultural communication knowledge & compentency; 異文化間コミュニケーションの知識と能力	I	R	R	R	R	R	R		R	R		R	R	R	R	R	R	R		R	R		M	M
8. Human service and community resources; 人的サービスと地域の社会資源	I	R	R		R		R		R			R			R		R	R			R		M	M
9. Certification and licensure; 認定と資格									I								R	R			R		M	M
10. Business practices; 実務									I								R	R			R		M	M
11. State and federal legislation; 州および連邦の法制度		I							R								R	R			R		M	M
12. Continuing professional development; 継続的な専門性の向上									I								R	R			R		M	M
13. Stress management and personal health; ストレス管理と個人の健康									I								R	R			R		M	M

Academic Requirements
（履修科目）

I=Introduced（入門），
R=Reinforced（強化），
M=Mastered（習熟）

	AMSL 1101 Elementary ASL 1 初級アメリカ手話 1	DEAF 1500 Deaf People in Society 社会におけるろう者	AMSL 1102 Elementary ASL 2 初級アメリカ手話 2	LING 1500 Intro/Linguistics 言語学入門	AMSL 2101 Intermediate ASL 1 中級アメリカ手話 1	DEAF 2500 Deaf Culture/History ろう文化／歴史	AMSL 2102 Intermediate ASL 2 中級アメリカ手話 2	AMSL 2700 ASL Linguistics アメリカ手話言語学	INTP 3500 Intro to Interpreting 通訳入門	INTP 3510 Interpreting Inquiry Texts 質問的談話の通訳	ENGL 3301 Advanced Writing in Discipline 専攻別上級ライティング	AMSL 3101 Advanced ASL 1 上級アメリカ手話 1	INTP 3515 Interpreting Narrative Texts 物語的談話の通訳	AMSL 3550 Performance Interpreting 舞台芸術の通訳	AMSL 3102 Advanced ASL 2 上級アメリカ手話 2	INTP 4510 Interpreting Expository Texts 説明的談話の通訳	INTP 4650 Ethical Decision-Making 職業倫理に則った意志決定	INTP 4651 Ethical Fieldwork 職業倫理に関するフィールドワーク	INTP 4940 Research Capstone 卒業研究	INTP 4515 Interpreting Persuasive Texts 説得的談話の通訳	INTP 4996 Interpreting Practicum 通訳実習		Core Courses 必修科目	Elective Courses 選択科目
Professional Education (cont.)（専門的教育（続））																							
b. Competencies（スキル（技能・能力））:																							
1. Language（言語）																							
a. ability to understand the source language, ASL, in all its nuances. 起点言語であるアメリカ手話のすべてのニュアンスを理解する能力	I		R		R		M					M			M								
a. ability to understand the source language, English, in all its nuances. 起点言語である英語のすべてのニュアンスを理解する能力								I	I		R		R	M		M	M	M	M	M	M		M	M
b. ability to express oneself correctly, fluently, clearly, and with poise in the target language, ASL 目標言語であるアメリカ手話で、正確かつ流暢に、また明確かつ場にふさわしい態度で自分を表現する能力	I		R		R		M					M			M								
b. ability to express oneself correctly, fluently, clearly, and with poise in the target language, Eng. 目標言語である英語で、正確かつ流暢に、また明確かつ場にふさわしい態度で自分を表現する能力								I	I		R		R	M		M	M	M	M	M	M		M	M
2. Message Transfer（メッセージの伝達）																							
a. ability to understand the articulation of meaning in the source language discourse, ASL アメリカ手話を起点とする談話において、話者の意図を正しく理解する能力									I	I			R	R		M				M	M			
a. ability to understand the articulation of meaning in the source language discourse, Eng. 英語を起点とする談話において、話者の意図をきちんと理解する能力									I	I			R	R		M				M	M			
b. ability to render the meaning of the source language discourse (ASL) in the target language (Eng) without distortions, additions, or omissions. 歪曲、付加、脱落することなく起点言語であるアメリカ手話の談話の意味を目標言語である英語に訳出する能力									I	I			R	R		M				M	M			
b. ability to render the meaning of the source language discourse Eng) in the target language (ASL) without distortions, additions, or omissions. 歪曲、付加、脱落することなく起点言語である英語の談話の意味を目標言語であるアメリカ手話に訳出する能力									I	I			R	R		M				M	M			

c. ability to transfer a message from a source language (ASL) into a target language (Eng) appropriately from the point of view of style, culture, and without undue influence of the source language. 起点言語の不適切な影響を受けずに、文化的に適切かつその場に適した言語スタイルで起点言語であるアメリカ手話から目標言語である英語にメッセージを訳出する能力									I	I			R	R		M				M	M			
c. ability to transfer a message from a source language (Eng) into a target language (ASL) appropriately from the point of view of style, culture, and without undue influence of the source language . 起点言語の不適切な影響を受けずに、文化的に適切かつその場に適した言語スタイルで起点言語である英語から目標言語であるアメリカ手話にメッセージを訳出する能力									I	I			R	R		M				M	M			
3. Methodology（通訳方法）																							
a. ability to use different modes of interpreting (i.e. simultaneous or consecutive), ability to choose the appropriate mode in a given setting. 多様なモード（同時通訳、逐次通訳など）で通訳する能力、その場にふさわしい通訳モードを選択する能力									I	I			R	R		M				M	M			
b. ability to use different target language forms, ability to choose the appropriate form according to audience preference. 目標言語の多様な言語形式を使用する能力、聞き手の好みに合わせて適切な言語形式を選択する能力									I	I			R	R		M				M	M			
4. Subject Matter（通訳内容）																							
a. breadth of knowledge allowing interpretation of general discourse within several fields 多分野にわたり、一般的な談話を通訳することができる広範な知識									I	I			R	R		M				M	M		M	M
b. sufficient specialized knowledge of one (1) or two (2) disciplines allowing interpretation of more specialized discourse within these disciplines 一つあるいは二つの分野において、その分野の専門的な談話を通訳する事ができる、深遠な知識									I	I			R	R		M				M	M		M	M
5. Techniques and logistics （通訳現場を整える技術と必要な機器の手配）																							
a. ability to manage the setting 通訳現場を整える能力									I	I			R	R		M				M	M			
b. ability to select and use appropriate equipment 適切な機器を選択し、使用する能力									I	I			R	R		M				M	M			
G4. Research（研究）																							
a. Understand the necessity for and values of research on interpretation and interpreter education 通訳および通訳教育に関する研究の必要性と重要性の理解								I	I	I			R	R		M	M	M	M	M	M			
b. Knowledge of the essential components of a research protocol 研究を進める上で必要な要素についての知識								I	I	I			R	R		M	M	M	M	M	M			

Academic Requirements
（履修科目）
I=Introduced（入門），
R=Reinforced（強化），
M=Mastered（習熟）

	AMSL 1101 Elementary ASL 1 初級アメリカ手話 1	DEAF 1500 Deaf People in Society 社会におけるろう者	AMSL 1102 Elementary ASL 2 初級アメリカ手話 2	LING 1500 Intro/Linguistics 言語学入門	AMSL 2101 Intermediate ASL 1 中級アメリカ手話 1	DEAF 2500 Deaf Culture/History ろう文化／歴史	AMSL 2102 Intermediate ASL 2 中級アメリカ手話 2	AMSL 2700 ASL Linguistics アメリカ手話言語学	INTP 3500 Intro to Interpreting 通訳入門	INTP 3510 Interpreting Inquiry Texts 質問的談話の通訳	ENGL 3301 Advanced Writing in Discipline 専攻別上級ライティング	AMSL 3101 Advanced ASL 1 上級アメリカ手話 1	INTP 3515 Interpreting Narrative Texts 物語的談話の通訳	AMSL 3550 Performance Interpreting 舞台芸術の通訳	AMSL 3102 Advanced ASL 2 上級アメリカ手話 2	INTP 4510 Interpreting Expository Texts 説明的談話の通訳	INTP 4650 Ethical Decision-Making 職業倫理に則った意志決定	INTP 4651 Ethical Fieldwork 職業倫理に関するフィールドワーク	INTP 4940 Research Capstone 卒業研究	INTP 4515 Interpreting Persuasive Texts 説得的談話の通訳	INTP 4996 Interpreting Practicum 通訳実習		Core Courses 必修科目	Elective Courses 選択科目
c. Ability to analyze studies related to interpretation 通訳に関する研究を分析する能力								I	I	I			R	R		M	M	M	M	M	M			
d. Apply research results to interpretation practice 研究結果の通訳現場への活用								I	I	I			R	R		M	M	M	M	M	M			
G5. Practicum（実習）																								
a. The experience shall provide the student with the opportunity for carring out professional responsibilities under appropriate supervision and professional role modeling. 実習での経験を通して学生は、プロとしてのロールモデルのもとで適切な指導を受けながら、職業的責任を果たす機会を得る									I	I			R			R	M	M			M			
1. objectives for each phase of the practicum shall be collaboraatively developed and documented by the faculty, practicum supervisor, and student 実習のそれぞれの段階の目標は、教員、実習指導員、学生が協力して設定し文書化する									I	I			R			R	M	M			M			
2. The ratio of the program faculty to students shall ensure proper supervision and frequent assessment of achieving the objectives. プログラムを担当する教員と学生の割合は、適切な指導と目標達成の頻繁な評価を保障できるものとする																		I			M			
3. Practicum shall be conducted in settings equipped to provide application of principles learned in the curriculum and appropriate to the learning needs of the student 実習は、カリキュラムの中で学んだ原則を応用できる環境の整った場所、学生の学習ニーズに適した場所で行う																		I			M			
b. Directed observation in selected aspects of the interpreting service provision process shall be required. Those experiences should be designed to enrich didactic coursework. These experiences should be provided at appropriate times throughout the program. didactic course work 通訳サービス提供のプロセスを、いくつかの選択した側面に焦点を当てながら観察する。観察体験は、通常のプログラム中で、適切な時期に実施される																		I			M			

c. In-depth experiences in delivering interpreting services shall be required. These experiences are not intended to emphasize unsupervised performance. さまざまな分野における豊かな通訳経験を積み重ねることが求められる。しかし、それは指導者不在での通訳活動を推奨するものではない																		I			M			
1. experience with various groups across the life span, various language preferences, and various service delivery models reflective of current practice さまざまな年代グループ、多様な言語の嗜好、通訳の現状を反映した多様な通訳サービスモデルを経験する																		I			I			
2. supervised by qualified personnel 有資格者による監督指導																		M			M			
3. to ensure continuity of application of academic concepts, the practiccum shall be complete in a reasonable length of time 学問的な概念が継続的に適用されることを保障するために、実習は適当な期間で終了しなければならない																		M			M			
4. the practicum shall be formally evaluated and documented by the practicum supervisor in accordance with program guidelines. This evaluation shall be shared with the student. 実習はプログラムのガイドラインに基づき、実習指導者によって正式に評価され、記録される.評価結果は学生にも伝えられる																		M			M			

Northeastern UNIVERSITY		ASL U610 Fall, 2005 Rico Peterson, Instructor

原文　GTC Log ガイドライン

GROWTH TOWARD COMPETENCE LOGS
GUIDELINES AND SUGGESTED ACTIVITIES

English Language Development:

- Make a list of all new vocabulary you encounter in readings that you currently have for class or for pleasure. Look up and record the definitions for these words and then create new sentences using these words. Attach your list of words and sentences to your log. When you have a list of five words or more, include them in your log. **Please Note:** Dictionaries are of varying quality and exist for remarkably different purposes. Interpreters are "language people" and require more from their dictionaries than do other people. In the same way that carpenters choose professional-grade tools, so must interpreters be informed consumers of information about words and language. Good dictionaries will contain pronunciation guides, etymologies, and markers for part of speech in addition to definitions for their entries. Good, basic dictionaries include the Random House College Dictionary and the Merriam-Webster. There are also a number of good online sources, but the same caution about quality applies here. Dictionary.com is a good place to start. Should you discover other online sources, please share them us. This sort of exploration and dissemination is also an excellent component to your competence log.

- Etymology, etymology, etymology. A good grasp of Latin and Greek roots of words is the best vocabulary-builder I can recommend. There are workbooks I can suggest for the aficionado, (e.g., the excellent *English Words from Latin and Greek Elements,* by Donald Ayers) but there are also a number of good websites devoted to showing where English words came from and how they relate to one another. Have a look at www.visualthesaurus.com/ This is a pay site, but it does include a free demo. It is one of the most interesting presentations of the relationships between words that I have ever seen. Here, too, discoveries that you make may prove invaluable to the rest of us. Please share!

- Moving beyond words, record idioms, jargon, regional dialect, or turns of phrase that are unusual or that in some way catch your attention. Explore the definition and etymology of these samples.

- Paraphrasing. Create sentences that mean the same thing in different registers. Ex: (formal) "I assuaged her concerns." (informal) "I reassured her." If you can come up with more than two versions, even better! (An example of an even more informal register here would be "I told her, 'no problem'.") When you have five or more of these register-stretching sentences, attach them to your log.

- Another more obvious but no less pleasurable activity is to plumb the depth and breadth of books on language usage. William Safire has an excellent series of compilations from his weekly column on language from the New York Times. Karen Elizabeth Gordon has a wonderful series of books on usage, starting with *The Deluxe Transitive Vampire*. I have a fairly extensive collection of books on this subject, and encourage you to graze in these fields. Include in your log any quirks or epiphanies that occur to you.

ASL Language Development:

- Make a list of all new signs that you encounter, including ones that you encounter in this class; when you have at least five, videotape yourself using these signs in new sentences. Turn in the videotape.

- Develop a list of signs that are synonyms in different registers. Record yourself signing them. When you have at least five, turn them in.

- Record (in writing or otherwise) relationships you discover between signs. Look for things like handshape relationships (family, team, group, class, etc.); rhetorical devices (movement patterns, formal register, etc.); changes in signs over time ("help", "teacher", "home", etc.); "rules" for acceptable initialization (if initialized English is taboo, why isn't initialized French?) As will all categories here, bring these phenomena into class so we can bite into them together.

- Give a narrative in ASL, then watch it and complete a written analysis of the grammar and clarity of the narrative.

- If your corrected homework contains feedback asking you to make corrections in articulation, vocabulary choices, or grammar, please make these corrections on video and turn them in.

- We will on occasion play some sign games to warm up for class. Some of these are games that deaf children have played since time out of mind. Study groups are always a good idea. Groups that focus on playing with signs can be very useful, especially when the groups include Deaf people.

Interpretation Development:

- Re-do any of your interpretation assignments or in-class practice in order to integrate the feedback you received.

- If you happen to be requested to interpret something, *and* there's an opportunity to be videotaped, you can count this activity, provided you include a detailed assessment of your work.

- Any and all of the activities described herein are good. Better would be that you approach the task of being a lifelong language learner holistically, applying these many different topics into an established pattern for learning. Best of all would be that from the documentation of your efforts you discern specific areas for growth and development, and implement a program for improvement.

日本語訳 GTC Log ガイドライン

ASL U610　2005年、秋期
担当教員：リコ・ピーターソン

能力向上（ＧＴＣ）のための記録（ログ）
ＧＴＣのガイドライン及び取り組みの提案

英語力向上のため：

❖ 授業の課題として、あるいは自分の楽しみとして本を読む際に、意味のわからない単語、初めて目にする単語のリストを作りなさい。そして、これらの単語の意味を調べて書きとめ、最後にこれらの単語を使った文章を作りなさい。この単語リストと文章を記録シート（ログ）に添付しておき、単語数が５つ以上になったら、ログに書き込みなさい。
注意：辞書にも色々ありますが、その質はさまざまであり、また用途も違っています。通訳者は「言語にこだわる人」であるため、一般の人と比べて辞書に求めるものが大きいはずです。大工が専門家に相応しい工具を選ぶように、通訳者が言葉や言語に関する情報を得るときには、有識者としての物選びをするべきです。良質の辞書にはそれぞれの単語（entries）の意味だけではなく、発音、語源、品詞などが記されています。良質でベーシックな辞書の例として、Random House College Dictionaryや Merriam-Websterなどを挙げることができます。オンラインの資料の中にも質の高いものがあります。オンラインの資料を使う場合もやはりその質の高さを見極める注意が必要でしょう。最初はDictionary. comから始めるのもよいでしょう。もしオンラインの資料で良いものを見つけた場合は、是非情報を共有してください。このように、新しい方法を模索し、よい情報をクラスに提供していくことも能力向上のログに記録すべき素晴らしい取り組みです。

❖ 語源、語源、語源！！語源の重要性は、強調しすぎることがありません。英単語の語彙を最も効果的に増やす方法として、ラテン語やギリシャ語などの語源を調べることをおすすめします。特に深い関心を持つ学生にはいくつかのワークブックなどを紹介できます。（例えばDonald Ayersの「*English Words from Latin and Greek Elements*」などは秀逸です。）また、英単語の語源や、単語と単語の関連性を解説する良いウェブサイトもいくつかあります。
www.visualthesaurus.com/ このようなウェブサイトに一度アクセスすると良いでしょう。これは有料サイトですが無料デモを見ることができます。単語と単語の関係に関する解説としては、これまで私が読んだものの中でも最も興味深い解説のひとつです。また、このような自習を通して、新たな気付きや発見があった場合は、クラスの他の人たちにとっても貴重な情報となり得るので、是非共有してください。

❖ 読書する際に、単語の記録に留まらず、さらに慣用句、特殊な専門用語、方言、その他珍しい表現方法、何らかの理由で目を引かれた表現なども記録しなさい。これらのサンプルの意味や語源も調べてみるとよいでしょう。

❖ パラフレーズ（言い換え）：文の意味を変えずに言語形態（レジスター)だけ変えて言いかえる練習をしなさい。例えば、「彼女の懸念を払拭した」と言う堅いフォーマルな文章を少しインフォーマルな言い方に変えると、「彼女を安心させた」という文になります。二つ以上の言語形態で文を言いかえることができれば、更によいでしょう！例えば上の例文を更にインフォーマルな言語形態で言いかえるなら、「彼女に『問題ないよ！』と言った」という文にできます。このように言語形態を変えて言いかえる例を５つ以上考えたら、ログに添付しなさい。

❖ 更にもうひとつ、誰でも思いつく方法ですが、十分楽しめる方法は語用論に関する本を深く読み込んでみることです。ウィリアム・サファイア氏（William Safire）は、毎週ニューヨークタイムズ紙の言語コラムに書いていた記事をまとめた素晴らしい著書をシリーズで出しています。カレン・エリザベス・ゴードン氏（Karen Elizabeth Gordon）も語用論に関する素晴らしいシリーズを出していますが、その第一巻が「The Deluxe Transitive Vampire」と題されています。私自身、このような題材の書籍を多く所有しています。みなさんにも是非この分野のものに目を通してみることをお勧めします。ログには、ひとひねりした表現、凝った表現などを思いついたら記録してください。

ASLの言語力向上のため：

❖ 新しく目にする手話表現のリストを作成しなさい。このクラスで新しく学ぶ手話も含めて構いません。５つ以上を記録したら、これらの手話を使って文章を作り、それらを手話表現しているところを撮影し、そのビデオテープを提出してください。

❖ 言語形態（レジスター）が違うが、意味は同じ手話（同義語）のリストを作成しなさい。これらを手話表現しているところをビデオ撮影し、５つ以上できたら提出しなさい。

❖ 手話同士の関連性（共通性）に関する発見を記録しなさい（文書で記録してもその他の方法を用いてもかまいません）。手形の関連性(例：FAMILY、TEAM、GROUP、CLASSなどのASL)、修辞的な手法（例：動作のパターン、儀礼的な言語形態など）、時の経過とともに変化した手話(例：HELP、TEACHER、HOMEなどのASL)、使用してよいイニシャル化（頭文字語）に共通する「規則性」（例：英単語からのイニシャル化は受け入れられないが、フランス語の単語からのイニシャル化は許されるなど）などを探してみてください。このような発見をクラスに持ってきて、全員で探ってみましょう。

❖ ASLで物語的なテクストを表現して撮影しなさい。それを自分で見て、文法の使用および物語表現の明瞭さに関する分析を書いて提出しなさい。

❖ 採点され返却された宿題について、表現の明瞭さ（アーティキュレーション）、語彙の選択、文法の誤りなどの修正を要求された場合、これらを修正・訂正したものをビデオ撮影し、再提出しなさい。

❖ 時々クラスのウォームアップのために手話ゲームを取り入れます。これらのいくつかは、昔からろうの子供たちが楽しんできた馴染み深いものです。スタディー・グループを作ることをお勧めします。グループに分かれた際に、手話遊びはとても効果的です。特にそのグループにろう者が居る場合、より一層効果が上がります。

通訳技術の向上のために：

❖ 宿題として提出した通訳練習やクラスでの通訳練習に対して教師やクラスメートからもらったフィードバックを取り入れて、再度通訳課題をやり直しなさい。

❖ 何かの際に通訳を頼まれて、これがビデオ撮影されたならば、これをログに記録する取り組みのひとつとして構いません。ただし、その際には、自分の通訳について詳細な評価を添付しなさい。

❖ ここに記した取り組み（アクティビティ）はすべてお勧めできるものです。このようなログ作りに終わるのではなく、ここで挙げた項目以外にもさまざまな項目を取り入れて、自分の学習スタイルを確立し、一生涯、統合的な言語学習を続けることができれば、なおよいでしょう。一番望ましいのは、自分の取り組みを記録する中で、さらに向上しなければならない分野を見つけ出し、向上にむすびつくプログラムを自ら実施することです。

（Dennis Cokely & Rico Peterson 作成）

対訳 GTC Log 記録用フォーム

能力向上を目指しての記録 **Growth-Toward-Competence Log**		氏名 **Name:** _____
Due date: 提出期限：		記録番号 **Log #** _____

Log all activities (not including classroom work and class assignments) that you believe serve to enhance the development of any aspect of your "Growth-Toward-Competence" as an interpreter.
通訳者として必要なさまざまな「能力の向上」を目指して行うすべての取り組みを記録してください（授業の学習・課題・宿題は含まず）。

English Language Development:
英語力の向上のため：

Time on Task (in hours) かけた時間数	Activity 取り組みの内容	Activity Assessment 取り組みの評価

ASL Language Development:
ASL の言語力向上のため：

Time on Task (in hours) かけた時間数	Activity 取り組みの内容	Activity Assessment 取り組みの評価

ASL-English Interpretation Development:
ASL→英語通訳の能力向上のため：

Time on Task (in hours) かけた時間数	Activity 取り組みの内容	Activity Assessment 取り組みの評価

English-ASL Interpretation Development:
英語→ASL 通訳の能力向上のため：

Time on Task (in hours) かけた時間数	Activity 取り組みの内容	Activity Assessment 取り組みの評価

(Dennis Cokely & Rico Peterson 作成)

原文 通訳観察レポート ガイドライン

ASL-English Interpretation
PRE-PRACTICUM OBSERVATION GUIDELINES

During this semester you will be required to observe interpreters working in a variety of settings. For each observation you will be analyzing specific aspects of the interpreted interaction. The purpose of these observations is to help you begin to look at interactions from an interpreter's perspective. **In this class (Expository Texts) you are required to do five (5) observations which should be somewhat evenly spaced throughout the course.**

Guidelines:

- You will select a specific goal or topic for each observation that will be the focal point of your analysis.
- You will record your observations and analysis on a standardized form that will be provided. Your analysis must be specific! If you are unable to be specific in part of your analysis, state so, but try to make educated and informed guesses about what you observed.
- Observations must be handed in within 48 hours of the interpreted interaction you observed. This will help your analysis be as fresh as possible. Any observation not handed in within 48 hours will not be accepted. Your course syllabus gives you deadlines by which each observation must be submitted. Any observation handed in after the stated deadline will not be accepted.
- More than one student may observe the same interaction, however each student should be analyzing a different aspect of the interaction.
- To the extent possible, your observations should be of different types of interpreted interactions (e.g. large group, small group, one-to-one). Observations of only one type of interpreted interaction will not be maximally helpful to you.
- As each observation is submitted, you must be prepared to discuss these in class as case studies. Not all of your observations will be discussed in class, but you must be prepared to discuss each of them.

For your pre-practicum observations you can choose from the list on the attached sheet. Each aspect has a brief explanation and questions for you to ponder. Since you have seven observations due, please try to cover at least five different aspects. Do not look at these observations as something to get through the easiest way possible, but rather as opportunities for you to look at interactions from an interpreter's perspective. If there are aspects you would care to analyze that are not listed below, please see me to discuss it.

Although you may intend to analyze one specific aspect of an interaction, you might not see observable evidence of that aspect. Remember that interpreted interactions do not, and can not, exist as mechanically separate and discreet parts. In such cases, recall and draw upon the other aspects on this list.

In general your analysis should focus on specific strategies and behaviors adopted by an interpreter to address some aspect of the interpreted interaction that may hinder or enhance the potential success of the interaction. Thus for each of these aspects you will ask yourself "What did the interpreter do (or not do) and why?". You should also consider "What could the interpreter have done (or not have done) and why?".

ASPECTS OF INTERPRETED INTERACTIONS

Environmental Aspects:

1) **Initial Logistics:** Were there logistical challenges due to the space or how the space was configured? In what ways was the space conducive to or a hindrance to a successful interaction? What adjustments to the physical environment were made (or should have been) so participants could see or hear?
2) **Environmental Variations:** Were there logistical challenges due to changes in the environment during the interaction (changes in lighting or sound)? If so, how were they handled? How could they have been handled? Were there challenges due to competing signals within the same communication channel (e.g. talking over an audiotape or talking while showing overheads, videos/movies)?

Interactional Aspects:

3) **Participant Relations:** Were there specific indications that the actual relationship between participants affected any aspect of the interaction? Were there specific indications that the perceived relationship between participants affected any aspect of the interaction? In what ways, if any, did the actual or perceived relationship influence the interpretation or should it have?
4) **Interpretation Team**: How did the interpretation team manipulate the environment to maximize their ability to work together? How could it have been manipulated? How was the interpreting task divided? How could it have been divided? How did the team members support each other?

Textual Aspects:

5) **Register & Style:** How would you characterize the linguistic and communicative register and style used by the participants? What factors might have lead the participants to use the register and style they did? What linguistic choices did the interpreter make in light of the participants' register and style?
6) **Staging:** In what ways did participants' use of specific lexicon, grammatical structure(s), and/or sequencing of information establish boundaries within which the interaction would proceed and within which the discourse would be understood? What strategies were used to interpret that information? Were the strategies successful? What strategies might have been used?
7) **Technical Information:** What were some specific examples of technical information or terminology within the text? What knowledge did that information or terminology presuppose? What strategies were used to interpret that information or terminology? Were the strategies successful? What strategies might have been used?

Ethical Aspects:

8) **Trust:** Were there specific linguistic and/or non-linguistic behaviors on the part of the interpreter that seemed intended to create or maintain a level of trust in either or both participants? Were there specific linguistic and/or non-linguistic behaviors on the part of either or both participants that they did not trust the interpreter or the interpretation? What strategies, if any, were used to react to such an expression of distrust?
9) **Power:** Were participants' use of specific lexicon, grammatical structure(s), sequencing of information and/or non-linguistic behaviors an expression of their actual or perceived power, position or privilege in this interaction? What strategies were used to interpret that information? Were the strategies successful? What strategies might have been used? Were there specific linguistic or non-linguistic behaviors used by the interpreter that reflected the interpreter's actual or perceived power, position or privilege in this interaction?
10) **Confidentiality:** Were there specific positive or negative linguistic and/or non-linguistic behaviors on the part of either or both participants concerning the issue of confidentiality? If so, why do you think the participant(s) felt it necessary to express to make such an expression? What strategies were used by the interpreter to handle that situation? Were the strategies successful? What strategies might have been used?

Processing Aspects:

11) **Interruptions:** Were there instances when the interpreter interrupted a participant? If so, what lead to the interruptions? What strategies were used in making the interruptions? What alternate strategies could have been used?
12) **Repairs:** Were there instances when the interpreter realized that an interpretation was inaccurate and in need of repair? What lead the interpreter to this realization? What strategies did the interpreter employ to effect the repair? What other strategies might have been successful in this interaction?
13) **Culturally Rich Points:** What were some specific examples in the text of culturally rich perspectives or information? In light of the participants' goals for this situation, were these culturally rich points successfully interpreted? If so, what strategies were used or might have been used?
14) **Time Management:** How would you characterize the interpreter's approach to and use of time? What strategies did the interpreter employ to maximize processing time? ? What strategies could the interpreter have employed to maximize processing time?

（Dennis Cokely & Rico Peterson作成）

日本語訳 通訳観察レポート　ガイドライン

ASL-英語通訳
実習前の観察に関するガイドライン

今学期中の課題として、さまざまな種類の通訳現場における通訳者の仕事を観察します（observation）。それぞれの通訳現場の観察において、行われているやり取りの通訳を特定の側面から分析します。この観察の目的は、さまざまなやりとりを通訳者の観点から見る力を育てることです。**本クラス（説明的談話）では、5 回の観察が必要になりますが、クラス期間中に同じぐらいの期間をあけて、それぞれの観察をおこなうことが求められます。**

ガイドライン:

- それぞれの観察において、分析の中心となる具体的な目標やトピックを選択します。
- 配布された観察記録フォームに、観察と分析を記録します。分析は明確でなければなりません。もし分析を明確に示すことができないところがあれば、それを明記した上で、自分の知識と情報に基づいた推測をするようにしましょう。
- 観察記録は、観察した通訳のやりとりから 48 時間以内に提出しなければなりません。できるだけ鮮明な記憶に基づく分析をおこなうためです。48 時間以内に提出されなかった観察記録は、受理されません。それぞれの観察記録の提出期限については、シラバスに明記してあります。提出期限を過ぎて提出された観察記録は、受理されません。
- 一つの通訳場面を二名以上の学生で観察してもかまいません。ただし、学生は、それぞれ別の側面から分析しなければなりません。
- 可能な限り、異なった種類の通訳場面を観察するようにしましょう（例：大グループ、小グループ、1 対 1）。一つの種類の通訳場面だけを観察しても、あなたのスキルを最大限に伸ばすことはできません。
- それぞれの観察記録を提出するときには、クラスでケーススタディとして討議する準備をしておくこと。すべての観察についてクラスで話し合うことはできませんが、どの報告についても議論できるように準備しておく必要があります。

実習前の観察で分析する側面については、添付したリストから選択することができます。それぞれの側面について短い説明と質問が書かれてあり、考えるヒントになります。提出しなければならない観察記録は７つなので、少なくとも５つ以上の側面から観察するようにしてください。この観察を、できるだけ簡単な方法で乗り切ろうなどとは考えず、通訳者の視点で通訳現場を見ることができるようになるためのチャンスだと考えてください。以下のリストに含まれない側面から分析することを希望する場合は、私に相談してください。

通訳現場に出向いて、特定の側面について分析しようとしても、その側面が観察できない場合もあるでしょう。通訳現場におけるやりとりは、自動的に個々の会話が完結した形で存在するわけではありません。このような場合は、リストに挙げた他の側面をとりあげてください。

全体として、通訳場面のある側面に対応するために通訳者が用いた特定の方法や行動に焦点をあて、この通訳者の対応がどのように通訳場面を成功させたり、妨げたりする可能性があるかについて観察しなさい。それぞれの側面について、「通訳者は何をしたのか（あるいはしなかったのか）、それはなぜなのか」を考えましょう。また「通訳者は、何をすればよかったのか（あるいはしなければよかったのか）、それはなぜなのか」についても検討する必要があります。

通訳現場のさまざまな側面

環境的側面：

１） **初期の環境設定**：通訳会場のスペースや会場設定による、通訳配置などの面での問題はなかったか。通訳環境は、どのような形で通訳に役立っていたか、あるいはそれを妨げていたか。話者や聞き手が通訳者を見たり、聞いたりすることができるように、どのような物理的環境の調整がなされていたか（あるいはなされるべきであったか）。

２） **環境の変化**：通訳中におきた環境的な変化（明るさや音など）による、通訳配置な面での問題はなかったか。もしあった場合、その問題にどのように対処したか。どのように対処するべきであったか。一つのコミュニケーションの流れの中で、情報シグナルが干渉しあうような問題はなかったか（音声テープを流しながら話す、OHP やビデオ・映画などを見せながら話す、など）。

人間同士の関わりに関する側面：

３） **通訳現場を構成する人々の人間関係**：通訳現場を構成する人たちの実際の人間関係が、通訳場面のやり取りになんらかの影響を与えていることを示す兆候はありましたか。自分が観察した彼らの人間関係が、談話のやり取りになんらかの影響を与えたことを示す兆候はありましたか。その場合、実際の関係あるいは観察された関係は、通訳にどのような影響を与えていましたか。あるいはどのような影響を与えるべきでしたか。

４） **通訳チーム**：通訳者同士が協力して、最大の力を発揮するために、通訳環境をどのように整えていましたか。あるいはどのように整えるべきでしたか。通訳者の業務はどのように分担されていましたか。どのように分担するべきでしたか。通訳チームは、どのように協力しあっていましたか。

テクストの扱いに関する側面：

５） **言語形態 および言語スタイル**：双方の話者が用いた言語およびコミュニケーションの形態とスタイルには、どのような特徴がありましたか。話者がそのような形態およびスタイルを用いた要因には、どのようなことが考えられますか。話者の言語およびコミュニケーションの形態とスタイルを踏まえて、通訳者はどのような言語的選択をしていましたか。

６） **談話の枠組み（ステージング：Staging）**： それぞれの話者の特定の語彙や文法構造の使用、また/あるいは話の組み立て方によって、談話の進行や理解の枠組みがどのように特定されたでしょうか。そうした制約のなかで情報を通訳するために、通訳者は、どのようなストラテジー（方略）を用いましたか。そのストラテジーはうまくいきましたか。どのようなストラテジーを用いるべきでしたか。

７） **専門的情報（Technical Information）**： この通訳場面の談話には、どのような専門的な情報や専門用語の具体例がありましたか。それらは、どのような知識を前提としたものですか。その情報や用語を通訳するために、どのようなストラテジーを用いましたか。そのストラテジーはうまくいきましたか。どのようなストラテジーを用いるべきでしたか。

職業倫理的側面：

８） **信頼（Trust）**： 通訳者が、一方あるいは双方の話者からの信頼を得るため、または信頼を維持するためにおこなったと思われる特定の言語的、また/あるいは非言語的な行動はありましたか。一方あるいは双方の話者が、通訳者あるいは通訳内容を信頼していないと思われる特定の言語的、また/あるいは非言語的な行動はありましたか。もしある場合、こうした不信の表れに対し、どのようなストラテジーで対応していましたか。

９） **力関係（Power）**：話者間の実際あるいは観察される力関係や、会話における立場や優位性が、話者の特定の用語および文法構造の使い方、会話の順序だて、また/あるいは非言語的な行動にあらわれていましたか。そうした情報を通訳するのにどのようなストラテジーが用いられていましたか。そのストラテジーはうまくいきましたか。どのようなストラテジーを使うべきでしたか。実際あるいは観察された通訳者の力関係、会話における立場や優位性が、通訳者の特定の言語的あるいは非言語的な行動にあらわれていましたか。

１０）**秘密保持（Confidentiality）**：一方あるいは双方の話者が、秘密保持のためにとった積極的あるいは消極的な言語的また/あるいは非言語的行動はありましたか。もしあれば、その話者はなぜそのような行動をとったのだと思いますか。その場合、通訳者はどのようなストラテジーを用いて対応しましたか。そのストラテジーはうまくいきましたか。どのようなストラテジーを用いるべきでしたか。

通訳のプロセシングに関わる側面：

１１） **割り込み（Interruptions）**： いずれかの話者が話しているときに、通訳者が割り込みをした場面がありましたか。もしあれば、どうして割り込んだのですか。割り込むときに、どのようなストラテジーを用いましたか。代わりにどのような他のストラテジーを用いることができたでしょうか。

１２）修正・訂正（Repairs）： 通訳者が通訳の誤りに気づき、修正が必要であると判断した場面はありましたか。通訳者は、どうしてその誤りに気づきましたか。誤りを修正するために、通訳者はどのようなストラテジーを用いましたか。その場をうまく解決するために、他にどのようなストラテジーをとることができたでしょうか。

１３）文化的要素（Culturally Rich Points）：通訳されている談話のテクストには、文化的要素が色濃く表れている視点や情報はありましたか。話者の目的にあわせて、こうした文化的要素は適切に訳されていましたか。その場合、どのような方法が用いられていましたか、あるいはどのような方法を使用するべきでしたか。

１４）時間管理（Time Management）： 通訳者は時間についてどのような意識をもち、どのように時間を使っていましたか。通訳プロセスに必要な時間を最大にいかすために、通訳者はどのようなストラテジーを用いていましたか。あるいは、どのようなストラテジーを用いるべきでしたか。

（Dennis Cokely & Rico Peterson 作成）

対訳 通訳観察レポート　提出用フォーム

Northeastern
UNIVERSITY

アメリカ手話—英語通訳
実習前観察記録フォーム

ASL-English Interpretation
Pre-Practicum Observation Form

観察記録番号 Observation #:_____　　提出日 Date of Report: _____

学生名 Student Name:_____

通訳場面の観察日 Date of Assignment:_____　　観察時間 Time of Assignment:_____

通訳場面の特徴を描写しなさい Describe the Nature of the Assignment:

_____

_____

_____

通訳場面を構成する人々の数 Number of Participants:

ろう者 Deaf:_____　　ろう者以外 Non-Deaf:____

通訳者 Interpreters:_____　　傍観者 By-Standers: _____

通訳場面における人物配置 Diagram the Arrangement of Participants:

◆ = Deaf Participant(s) 談話に参加しているろう者 ● = Non-Deaf Participant(s) 談話に参加しているろう者以外の人々 ▼ = Interpreter(s)　通訳者 ■ = By-Stander(s)　傍観者	

観察のねらい：（観察のねらいは一つだけではなく、万一観察できなかった時のためにもう一つ予備のねらいを用意しておくこと）
Target for Observation: (select a primary target and a backup target in case there is no evidence of your primary target)

通訳環境 Environmental:	→初期の環境設定 Initial Logistics	→環境の変化 Variations	→その他 Other _____	
人間同士の関わり Interactional:	→通訳場面を構成する人々の人間関係 Participant Relations	→通訳チーム Team	→その他 Other _____	
職業倫理 Ethical:	→信頼関係の確立 Establishing Trust	→力関係 Power	→秘密保持 Confidentiality	→その他 Other _____
言語面の扱い Textual:	→言語形態・言語スタイル Register/Style	→談話の枠組 Staging	→専門的情報 Technical Info	→その他 Other _____
通訳上の対処方法 Processing:	→割り込み Interruptions	→修正・訂正 Repairs	→文化的要素 Culturally-Rich	→その他 Other _____

（Dennis Cokely & Rico Peterson 作成）

Northeastern
UNIVERSITY

アメリカ手話—英語通訳
実習前観察記録フォーム

ASL-English Interpretation
Pre-Practicum Observation Form

あなたが観察のねらいとした側面において、どのような問題点・困難がありましたか。それを解決するために、どのようなストラテジー（方略）がありましたか。あなたが観察した側面で、成功した例、効果的に対処されていた点はありましたか。
What difficulties/dilemmas arose in the observational Target? What strategies were to resolve them? What aspects of your observational target went smoothly or were effectively handled?

_____

_____

_____

_____

あなたが観察のねらいとした側面に対処するために、通訳者がとったと思われる行為には、どのようなものがありましたか。

What behavioral indications did you notice for your observational target?

観察された問題点を解決するために、どのようなストラテジーを用いるべきでしたか。

What strategies could have been used to resolve the observed difficulties?

観察した通訳場面で観察のねらいとした側面について、あなたの意見を書きなさい。

What general comments do you have about the targeted aspect of this specific interaction?

観察した通訳場面で観察のねらいとした側面について、疑問や質問があれば書きなさい。

What general questions do you have about the targeted aspect of this specific interaction?

（Dennis Cokely & Rico Peterson 作成）

参考文献

吉川あゆみ（2008）アメリカにおける手話通訳者養成の動向とノースイースタン大学の取り組み.「聴覚障害学生サポートネットワークの構築をめざして―2007 年度アメリカ視察『高度専門領域に対応した手話通訳者の養成』報告書」日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）. p24-35.

吉川あゆみ（2010）ノースイースタン大学における手話通訳養成Ⅰ―手話通訳養成課程の概要―.「聴覚障害学生サポートネットワークの構築をめざして―2009 年度アメリカ視察『高度専門領域に対応した手話通訳者の養成Ⅱ』報告書」高等教育機関のアクセシビリティ向上を目指した筑波聴覚障害学生高等教育テクニカルアシスタントセンター構築事業・日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）, p10-16.

木村晴美・宮澤典子（2010）ノースイースタン大学における手話通訳養成Ⅱ―授業風景と学生達―.「聴覚障害学生サポートネットワークの構築をめざして―2009 年度アメリカ視察『高度専門領域に対応した手話通訳者の養成Ⅱ』報告書」高等教育機関のアクセシビリティ向上を目指した筑波聴覚障害学生高等教育テクニカルアシスタントセンター構築事業・日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）, p17-22.

Dennis Cokely(2005)Curriculum Revision in the Twenty-First Century: Northeastern's Experience. Advances in Teaching Sign Language Interpreters. Cynthia B. Roy, Ed. Gallaudet University Press, p1-21.

謝辞

今回の来日では、日-英通訳の高木真知子・諸山久美子両氏に大変お世話になりました。末尾ながら心より感謝の意を申し上げます。

また、本報告書作成にあたり、英文資料の翻訳は高木真知子・瀧澤亜紀両氏にご協力をいただきました。

本事業は、文部科学省特別教育研究経費（筑波技術大学／平成 19～23 年度）による聴覚障害学生のための拠点形成事業の一部です。

Rico Peterson 先生来日特別講義報告書
米国ノースイースタン大学における手話通訳者養成

発行日：2011 年 3 月 31 日
発　行：筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター
〒305-8520 茨城県つくば市天久保４－３－１５
編　集：白澤麻弓・蓮池通子・中島亜紀子
企　画：高等教育機関のアクセシビリティ向上を目指した筑波聴覚障害学生高等教育テクニカルアシスタントセンター（T-TAC）構築事業

国立大学法人 筑波技術大学

本事業は、文部科学省特別教育研究経費（筑波技術大学／平成 19～23 年度）による聴覚障害学生のための拠点形成事業の一部です。